

形而上作用としての資本

— (反)資本論・予説 —

第 1 稿

橋爪大三郎

はじめに	頁
1 行為Aのまなざし	2
2 行為秩序の展開	4
3 資本体	7
4 喩としての貨幣	9
5 資本の形而上作用	11
註	15
文 献	

近代という名の歴史上の一大運動は、社会空間の全域のすみずみにまでその資本制的な編成を波及させることにより、自らの完全な姿をいまも蒼々と出現させている。こうした空間編成のなかで、(資本制的な)資本^{*1}は、形而上学的な専制^{*2}の名でよぶにふさわしい君臨をはたすことになった。しかるに現在、この資本の専制は、ますます不可視なるものへとその君臨の様態を変化させている。この結果、空間の資本制的な編成に抗する形而上学的な叛逆の試み^{*3}のいくつかが失速するにいたったばかりか、資本ないし資本制という事態それ自体もなお、学的言説の追究をのびつつけており、分析的言及の対象としてすら照準されていない^{*4}。

資本制とその動向を批判的に対象化するためには、資本やそれに関連する社

会諸形象を把握するに十分な一貫した記述手段をすくなくとも、用意する必要がある。この記述手段は、資本制空間の軌跡を計測するための座標系へと転化すべきものであるが、そのような計測が可能であるためには、この記述手段がそれ自身近代に内属するもの、資本制空間をかたちづくる固有の運動に共振するものであってはならない^{*5}。ここに資本制への方法的な考察が記号論と結びつく必然性がある^{*6}。

資本へ、この近代のもっとも重要な形象へと追及する考察のためは、それゆえ、なにより基本的な人間的事実の、その、行為の原理的論及によって研ぎすまされていなければならない。

1

【1】 行為は人間の、そして社会の、もっとも基本的な事実である。

なるほど、行為は、世界のさまざま他のことから伍して、数ある出来事のうちの一部にかざられるにすぎないのではないかと思われるかもしれない。たしかに。しかし世界がわれわれにおとずれるとき、それはかならずわれわれの行為を経由するのだ。要するに行為とは、意味の領域と実在の世界とをつなぐ、出来事そのものである。このような出来事たる行為の膨大な集積として、われわれもまたわれわれの社会も存立している^{*7}。

【2】 行為論それ自体はしかし、社会(科)学のなかでそれか占めるべき正当な位置を占めてきたとは言えない。われわれのしるいくつかの接近法(たとえば行動主義や主意主義の行為論)は、みたところ行為分析を中心に据えるもののように受けとられよう。だが、それらは、行為をそれとは別箇の手続きや実体のなかに回収しようとはかる試みであり、行為への直截な注視を逸らさせることに通じた^{*8}。

行為それ自体への固有のまなざしを、方法的な探究へ組織することが、必要な出発点をなす。その場合、方法とは、行為という出来事の実態——規範的な形式性^{*9}——を剥出し、説明的に再構成するものでなければならない。

【3】 さて、記号論の今日の成功は、もともと言語分析にその基礎をおくものであった^{*10}。

記号論は、意味の科学（すなわち、意味現象や意味にかかわる人間の諸々の活動領域を徹密に方法的に解明する作業）たることを目標とする。その分析手法は、基本的に言って音韻論と祖同的に編まれており、対象を対立のシステム（le système des oppositions）としてとらえたのちそれを要素的な素性の基底的な対立の組みあわせへと還元するものである。記号論の手法が比較的よく成功をおさめている語分野——分類体系論、神話研究、芸術記号論、……——の仕事はおおよそ、このような手続きを核心とする、と言ってよい。

行為もまた、有意味な人間活動であるにちがいない。それでは、記号論的な接近法は、行為を理論的にとりあつかおうとする際に、どのように有効であるとみられようか？

【4】 ごく形式的に考えて、行為分析の枠組みが記号論的な接近法を含まなければならないのはあきらかである。

言語は要するに、人間の行為の所産である。言語（文の集合）をうみだす行為は、発話行為であって、口頭の発話運動を介して時間的＝線状的に展開していく^{*11}。あるまとまった概念を表明するにたる発話の1単位は、文を発言する場合であるが、文は、物理的な制約もあって時間的＝線状的に展開していくものの、もともと空間的な性格のものであると信じられる点が注目されよう^{*12}。ともあれ、言語分析は、行動主義や心理学の枠組みをこえた、言語学に固有の方法によるのでなければ首尾よく実行できない^{*13}。とすれば、言語を含めた行為一般の分析が、（言語分析の方法の拡張である）記号論的な接近法をとらなければ

なければならないのは至極当然であると言えよう——

行為（一般）もまた、時間のなかで展開する線状性をとらえている。そして、要素的な単位（単位行為）から組みあけられたつらなり（行為連鎖）をなす、と想定できる。各人は自分の行為連鎖を意味あるものとして把握していると思われる^{*14}ので、その事実を行為連鎖のうえでとらえる形式的な手続きを試作し確定してゆく必要がある。

行為連鎖のうち十分に短い部分、あるいは単位行為に関してであれば、ひとは文の分析と並行する手続きを活用できるのではないかと思われる^{*15}。なぜならそうした要素的な行為は、時間的よりもむしろ空間的な展開をもつものであるから^{*16}。しかしながら、その範囲を越えるより長大な行為連鎖についてはどのような分析枠組みを用意すべきであるのか、これまで話めた議論が試みられたことがなかった。行為の記号論の試みをこの領域に拡張することも、ひとつの可能で意義ぶかい方向であるが、その全面的な成功を無条件にのぞむわけにはいかないいくつかの理由がある^{*17}。

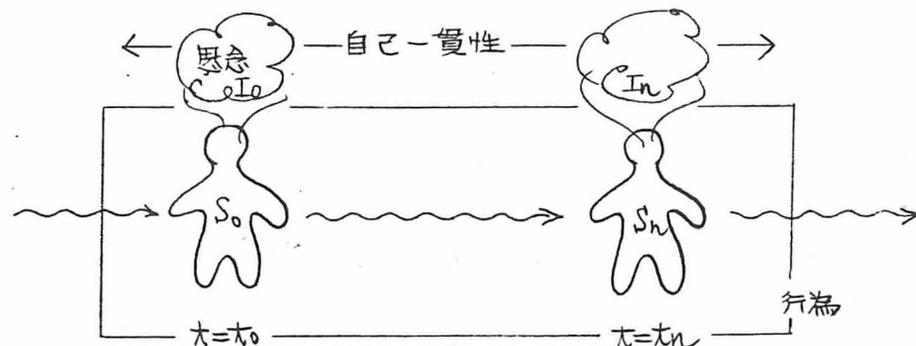
2

【1】 長大な行為連鎖をそれ自体として扱うのが困難である理由は、行為の連鎖を行為に独自の展開の論理によつては（必ずしも）たどれないことにある。行為は本来、環界（行為外的な要因）に対する反応として営まれるという側面をもつものであるが、そこから、①物的環界からの反作用、②他の行為と相互作用系をなすことからする反作用、を被ることになる。①は行為が労働であり、技術として形態化していく契機を、②は行為が分業の実現であり、社会規範的なもの^{*18}へと形態化していく契機を、それぞれ与えるものであるが、これらはいずれも、（狭義の）記号論的な視野のなかでは知られることのなかった要因である^{*19}。

行為がしばしば行為外的な要因によって左右されるのであるとすると、行為連鎖をその内在的な秩序（のみ）によって追尾することはかならずしも妥当でなくなる。行為連鎖は、つねに攪乱によって衝き動かされ、偶発的に展開する過程とみえてこよう。それでは、行為の統合構造は想定不能なものか？

行為がランダムな序列で生起するものであり、そこに何の秩序も存在しないのだとすれば、そのような行為連鎖を説明する努力もまた不必要となる。これは何ら悲しむべきことではない。したがってわれわれはさしあたり、行為連鎖がある一貫性をもって展開していくような場合に、関心を集中することにしよう^{*20}。

【2】 行為は本来的に、自由である^{*21}。行為が秩序ある行為連鎖として展開するという事態がおこっている場合には、したがって、その行為を中止したり別のものにしたりするという自由を行使しないという条件が、満たされているのでなければならない。この条件を、思念の自己一貫性 (self-consistency) とよぼう^{*22}。行為連鎖が、行為者の身体のある状態（ないし単位行為） S_0 から、別の状態（ないし単位行為） S_n への、断系列に即した変化であるとする。それに対応して行為者が抱く思念 I_0, I_n は（どのような内容であってもよいが少くとも）かかる行為連鎖の展開を不可能とするようなものであってはならない^{*23}。



行為が自由であればあるほど、行為の成立が個体の心的機能に依存する程度もまた大きなものとなる。そうした機能はさまざまでありうるが^{*24}、そのうち思念の自己一貫性をささえるものとして、心的な自己把握を考えておく^{*25*26}。

【3】 自由な行為の集積である社会も、ある角度からみると、そこに自律的な行為の展開系列の下位秩序をかくすものとみとめうる。そうした行為の下位秩序として注目すべきは、まず技術とその展開の系列であり、ついで行為の純粋形式とその展開系列であり、さらに組織体とその展開系列である^{*27}。

技術は、物的世界のなかで物的世界にはたらきかけ、それを人間の世界に作りなそうとする行為が、かえって物的世界の側から自然的な秩序^{*28}にもとづく粗紋を課せられながら織りなす行為秩序、のことである。行為の展開に対する物的世界の側からのこの規定性 (Bestimmtheit) は、身体とい自身は物的世界のなかでのひとつの事物であり、その限りで、行為の手段や行為の対象としての事物と対等に相互作用しななければならないという、不可避な事実にもとづく^{*29*30}。技術として実現される行為秩序の展開系列を、技術論が扱う^{*31}。

行為の純粋形式は、身体が（物的世界の外的対象でなく）作動する身体自らに能動的に関わって、もっぱら身体の帯びる形式性を純化して浮かたせようとする志向のもとにくりひろげられる行為の展開系列である。具体的にはこれは、舞踊、音楽、美術その他^{*32}の美的な行為の諸範疇に通じるものである^{*33}。このような行為は純粋な形式性を発振し、またそれを享受する^{*34}。こうして実現される行為の展開系列を、行為の純粋形式論が分担する。

組織体は、行為（する身体）が互いに他の行為（する身体）を自らの行為の構成要件^{*35}となし、全体として行為する諸身体からなるひとつの断列へと編成されるところに生ずる、行為秩序とその展開系列のことをいう。組織体は、行為の現在が互いに他を包絡する、行為の相互作用の直接性を離脱できない^{*36}ため、空間の局部に実現される協業系^{*37}として現象する。組織体として実現される行為秩序とその展開系列を、組織体論が分担する。

【4】 直接もしくは間接^{*38}に、有機的な身体の生理的な必要に資する行為を、通例にたがって、労働とよんでおこう。

労働は、もっとも単純には、自らの行為連鎖を道具系のかたちで実現する
ある^{*39}。道具系の場合には、道具（すなわち、行為手段たる事物）は、行為
首の展開する行為の統合構造に服している^{*40}。

しかるに、もと道具であった事物の内蔵していた因果連鎖が、技術上の要請
によって膨脹し、個体の行為の統合構造から外にはみだしてしまう場合、行為
秩序は機械系へと移行している、と言え^{*41}。機械系は、労働の単純な形態が
となえていたような行為の統合構造をそのもとに下屬させる、より大なる行為
の集合的秩序を設定する^{*42}。逆にいえば、機械系のもとで、個体の紡ぎ出す行
為連鎖は技術として受結的なものではなくなっている。

機械系は、自律的に受結したものであることをやめた個体の行為連鎖を、
技術上の要請にしたがって受結した行為秩序へと編成しなければならぬ。と
のため、機械系は、組織体として自らを実現しようとする^{*43}。

3

【1】 道具系もしくは機械系において、反復的に（集合的な）行為連鎖のな
かに織りこまれる事物（道具、機械、その他加工品系列の事物）を、（広義に）
資本という^{*44}。資本は、技術が展開できるための前提であり、問題の行為秩
序の可能条件であって、その根拠で行為秩序の主役に転化すべき素地をもつ^{*45}。

技術が反復的に行使されるあいだに、絶えず資本は自らを更新していく^{*46}。
このように持続する資本からみるがえって機械系をみるなら、それは、幾多の
資本をつつみこんで資本とともに自らを再現する組織体、としてとらえられよ
う。技術的な要請の裏付けをもって養生する、このような事物と人間との集合
的な運動形態をば、資本体^{*47}と名付けることにする。資本体は、それをかた
ちづくる資本ないし機械系の各構成素のあらゆる代置を通じて、存続する可能

性をもつ。

【2】 交易が発展し、さらには市場が全域化したような社会では、いく断片
の資本体を抱える分業系は、しだいにその相互連関の多くを市場での交換に移
しかえるようになる。資本体は、加工品を内蔵し加工品を産出することも通
じて、相互に連接しあう。市場において自らを再現する資本体の能動性は、採
算と利潤に向かって加速されている^{*48}。

初期には、資本体は、分業系のなかに結露しはじめても、自らを急速に拡大
できない。交易や市場を通じて流通するのは、資本体として具体化されている
生産工程の、最終産物（のごく一部）であり、それ以上ではないからである^{*49}。
資本体は、他の組織体のあいだにまぎれて、共同社会の伝統と習俗の沈殿のな
かで硬化している^{*50}。

だが資本体は、機械装置をはじめとするその各構成素の分解性と互換性を高
めることで、徐々にその文脈自由な展開可能性を獲得していく。ことに、行為
連鎖の正則化された断片が機械系の互換的な構成素となったとき、資本体は産
業化の段階に達する^{*51}。

資本市場と賃労働市場の成立によって、資本体はその代数的互換性におい
て増殖する社会形象としての本性^{*52}、すなわち資本制的資本としての能動性を
全く露わとする^{*53}。この変貌は、市場での貨幣が資本制固有の性能——信用創造
——を発揮しはじめるのと並行する^{*54}。資本市場（すなわち、資本制的貨幣の
市場）は、資本体同士の競争的な自己増殖傾向を支配する、相互抑制的な均衡
をもたらす^{*55}。

資本制的資本の作動をなお精緻に解析するため、資本体の変貌を演出する、
貨幣の変態へと視線を転じよう。

4

【1】 貨幣形態の歴史的動態は、まさしく現物性からの乖離の道筋である。資本制的貨幣にいたって、この乖離はその極に達する。かつて資本制批判を敢行したマルクシズムは、その固有の実体観により、貨幣を現物（具体的には、金）と相等視した。しかし貨幣は、もともと実体であるよりは、市場における意味作用を、そう、ただちに権力の微細な作用を感知させるような交換の推移性^{*56}を、担ってきたのである。

資本制的貨幣は、単なる交換の仲介手段たるにとどまらず、信用創造を通じて資本体の運行を司るべく、端的に喩の構造をもってたち現われる。喩の構造とは、より直説な貨幣機能から派生する、意味作用と権力の工学的仕掛けたること、をいう^{*57}。

貨幣がその直接態から派生する系列を、遡うとしよう^{*58}。

【2】 一般に貨幣を規定する^{*59}ならば、市場において一般的購買力としてはたらく作用素、となる^{*60}。ここで貨幣は、商品貨幣（一般的享受可能性たる商品が、たまたま一般的受領可能性をも帯びたもの）でも、規約や制定による貨幣でも構わない。

貨幣は、特定種の物に在る自らを一般的購買力として指示するような意味作用とともにある^{*61}。

購買力は市場で適合しながら発現される量的現象であるから、貨幣もまた数量的物に在るを要す。秤量貨幣の純分は、かかる購買力を意味するものだが、貨幣は、そうした現物貨幣への間説によって、購買力としての自らを提示する^{*62}。すなわち貨幣は、その名目量によって地金＝現物の一定量を指示し、そこから派生的に自らを一般的購買力としてあらわす。だが残念なことに、貨幣の

理想、すなわち名目（形式）と純分（内容）との一致は、つねにかりよめのもののであるため、貨幣は現物から信用へと離脱できない^{*63}。

各種の証書や手形もまた、貨幣となる。これらを書記貨幣とせば、それらは文言によって支払いに充当すべき貨幣の所在を指示することで、自らを一般的購買力としてあらわす。手行文句は自己言及的な執行文として自存するが、それが指示する（時間的・空間的な）遠隔にある貨幣（現物性）と蓋然的にしか対応しえないため、信用への離脱を阻まれている^{*64}。

【3】 市場の成立と同時に、利殖への志向が蔓延する^{*65}。利殖の手段としての貸付けをめぐる市場（貨幣市場）では、反対給付たる利子が利殖をもたらす。資本財を市場で調達しながら産業が急伸長しようとするとき、貸付けをめぐる競争と利子の高騰がまきおこり、いわゆる貨幣の不足が生じる^{*66}。

不足する貨幣をとりあえず貸付けから調達しようとする個々の努力は、全体として貨幣の不足をなお激しくする^{*67}。そこでおもいつかれる対処法のひとつは、兌換紙幣の発行である^{*68}。兌換紙幣は、準備に充てる貨幣との交換可能性を含蓄することによって、自らを一般的購買力とする。紙幣と準備との対応は、通常は想像上のものであり、通貨量を膨張させる。しかし、兌換紙幣は、なお本位貨幣ないし現物の觀念に緊縛されており、信用貸与の手段としても不完全である^{*69}。

貨幣の不足へのもっとも合理的な対処法は、銀行による信用貸与（信用創造）である。こうして創りだされる貨幣は、（要求払）預金の形態をとる^{*70}。すなわち預金は、口座に預けおいてある貨幣の引出し可能性を含蓄することによって、自らを一般的購買力としてあらわす。

預金は、預金者の手許における端的な貨幣の不在である。だが不在である貨幣は、銀行に所在するというわけでもない。じつはこの預金は、すべてがいちど引出したれることはあるまいと見込んで、銀行が勝手に無(!)から創造した

ものである^{*71}。そこで支払手段としての預金は、小切手のかたちをとる。小切手は、預金の振替を指示する文言として定在することにより、自らを預金通貨と等置させる意味作用をもつ。こうして預金は、現物との引照をまねがれる^{*72}。

【4】 兌換紙幣と、とりわけ預金通貨とを、喩としての貨幣とよぼう^{*73}。これらより現物的な貨幣を間接に含意することで、貨幣たることをしているからである。金本位制のもとでは、末端の預金通貨は兌換券と、兌換券は本位貨幣たる金と、含意により結ばれてある。この喩的な位階秩序のゆえに、空間全域にわたり信用の調節が作動する^{*74}。

預金通貨による信用創造のメカニズムを末端とする喩的な位階秩序、これこそ資本制的な貨幣を特徴づける形態にほかならない。

このメカニズムは、局在する具体的な社会関係を、全域にわたる一般的な権力=貨幣へと変換する装置である。(その作動は、兌換が廃され兌換紙幣が現物の位置についても、変わらない^{*75}。) すなわち、銀行の行なう手形割引は、流通性の限られた手形(債権)を、より受領性の高い預金(現金)へと変換する手続きであるが、この操作を通じて、問題となっている資本体の事業の有望性や採算など関係者のみが知りうる具体的な諸要因を、空間全域で一様な基準から評定し、資源請求権を分配するのである。資本体があまさずこうした装置に連絡することにより、空間全域にわたる資本体の合理的な配置と編成が、すなわち資本制空間の形成が、可能となる^{*76}。

5

【1】 行為連鎖の断片を集合的に下屬させつつ自らを維持する資本体が、そこに充当されてある各身体に対して及ぼす効果を、資本の形而上作用といおう^{*77}。資本体は、その技術的前提である思念の自己一貫性も、集合的に調達しな

ければならない。資本体が共同社会の習俗に埋もれていた間は、それが自体的な形而上学としてふるまひ、各一な指身体を供給したから問題はなかった。これに対して、資本制下の資本体は、共同社会から離れた遊離身体に対し、より積極的な形而上作用を発揮することが要求される。

こうして、遊離身体は主体化を施される。習俗を外れもはや各一でない身体は、近代という絶対空間から一様に主体の規定をうけとり、正則化される。資本体の発揮する形而上作用は、心的自己把持をひきよせ、いまや市場に浮遊する主体=身体を又脈自由に排列しはじめ^{*78}。

M. Weber は、資本制的な倫理の淵源を、カルヴィニズムの救済の教義に遡とった。たしかに、予定説に帰依する身体は、地上の蓄財と利潤追求へと容易に動機づけられる。ただしこれには、神学=実体的形而上学からの「脱臼」^{*79}を経ることが必須なのだ。宗教的寛容、この形而上学の括弧入れは、前近代から近代への空間的地じりを属結する。こののち信仰や実体的形而上学や哲学体系は、主体=身体に各私的に内属するものとなり、かわりに外的な行為連鎖(の断片)ばかりが自由に資本体の下屬させうるものとなる^{*80}。

【2】 マルクシズムは、資本制下における資本体の作動を、主体の隷属の物語として解説する^{*81}。遊離身体(プロレタリア)を「解放」する(資本制空間の外に連れ出す)ためには、そのかりよめの主人=資本をまず脱主体化せねばならぬ。——こうした解説を教条に掲げ、革命の主体(党)が資本体を臣圧し、資本制の解除を図る^{*82}。資本体は利潤動機を剝奪され、逐一その挙動を全体計画のなかで特定される。党は当面、空間の特権的な主体、絶対の命令者としてふるまう。こうした経済の計画的・一元化は、マルクシズムによる資本制批判の実践の帰結にほかならない^{*83}。

社会主義は、覆われた共同社会の記憶をたどる。資本制の動機が共同社会を解体し遊離身体を輩出しつづける間、党は全体意思を体現できようか、これは衆の間の可能性にすぎぬ^{*84}。しかも計画的・一元化は、非効率と不自由とを相伴

う^{*85}。そこで必ず、計画的一元化の妥当性、さらには党と革命の正統性への疑義が湧きおこる^{*86}。体制へのこの疑義が暗いぬ闇、その下で主体=身体の被る抑圧は監禁の相さへ帯びる。なぜなら空間は、資本制と異なり、堅固な実体的形而上学によつてすみずみまで形態化されているからである^{*87}。

マルクシズムの批判は、資本体の内部構成に手を付けるものではなかった。なせならそれは、人間と社会のもっとも基本的事実たる行為の、^{形式性}形式性への目配りを欠いているからである。革命のもたらした計画的一元化の体制は、資本性空間の外ではなくて、純然たる資本制とたかだか優劣の順序だけを施されるにすぎないような、資本制の一亜種と規定すべきものである^{*88}。実際、そこで労働する主体=身体は、資本制下におけると類同の現実を体験する。この形而上学的な叛逆のもたらした亜空間は、資本制としての不完全さゆえに、やがて純然たる資本制へと復帰しよう^{*89}。

【3】マルクシズムの資本制批判は、所有論に依拠するものであった^{*90}。所有の概念は、範疇的であり、形式的でない^{*91}。そこでわれわれは、行為論の(内蔵する形式的な)観点から、資本制という事態をさらに追ってみよう。

マルクシズムという名の解放の形而上学は、諸々の資本体を統轄する計画的一元化の体制をうんだ。しかるに資本制空間は、可視的及形而上学的実像を結ばない^{*92}。多くの資本体は、競いあい依存しあって、互いが互いを相対化する。そして総体としての資本体の作動(経済活動)は、各私的な価値の表明(消費支出)による集合的な義認を与えられる^{*93}。A. Smith はここに思慮の予定期和を直観したが^{*94}、意思論からこれを見ると最善に近いことは周知の結果である^{*95}。ただしこの結論が有効なのは、各私的な価値が^{メソクシス}実定的に定立できるとした場合の話であるが^{*96}。

資本体に組みこまれる行為連鎖(の断片)は、事前にその形式を特定されるのではない。アモルフなまま時間を経て移譲されるのである^{*97}。行為の具体相は、資本体が課す機械系としての要請により定まる。この要請を質く必然は

おむね行為者の理解を超えている^{*98}。しかも主体=身体の各私的な価値からも意味づけることができない。移譲された行為連鎖は、資本体の形而上作用へ向かつて吸いとられた空虚となる^{*99}。

この空虚を埋めもどすべき代償が、彼の消費生活である筈であった。ここでは事物(消費財)と行為は、資本体の域外で、各私的な価値を伴現すべく非別される^{*100}。生産/消費という概念的な範疇区分は、もともと資本制下で、このように対立する行為連鎖のいたつの部分のことである^{*101}。しかし消費社会論も指摘するように、今日、消費の様式自体が資本体によつて生産されはじめている^{*102}。効用は、資本制の作動を義認する実体的な価値の畜積ではなくなった^{*103}。資本制は、浪費と蕩尽の程式と一脈通ずる外見をもった、当初とは別様のある内閉的装置へと変質して行く。

【4】資本制下での労働は、言表の術なき沈黙の淵にしずむ端的な事実としての行為である^{*104}。この沈黙を課するのは、資本の形而上作用なのだが、これを対抗的な形而上学によつてはねのける試みは、計画的一元化と消費の逼塞^{*105}を結果した。消費社会はちょうどこのような体制と裏腹だが、そこで消費の邏輯は、消費の実態に先回りする広告の邏輯とともにある。広告とは、実像としての形而上学を結ばぬ空間における資本体の饒舌である^{*106}。生産から消費にまでまたがる、かかる資本体の専制は、不断に変化しつづけてやまな運動である資本制を、それに端緒を与えた古典近代と十分背馳する地点にまで運んできた。行為秩序と意味の形式分析をすすめて、資本制の変貌にはお記号論的な追展のメスを加えてゆくなら、われわれはほとんどなく、資本制の完成と瓦解の描像をいちどきにとらえることになるに相違ない^{*107}。

* 本稿第4節は、旧稿(稿爪口19791)からの抜粋で、文面も変通する部分がありまゝから、ひとことおことわりいたします。

註

1*1 資本制的資本とは、資本一般のなかでもとりわけ、資本制に固有の存立と運動の形態をもつものをいう。そのメルクマールとしては、①資本市場の成立、②賃労働の成立、③資本制的貨幣（＝論としての貨幣）、の3つをあげべきであるが、これらの内在的な関連や詳細な規定については、後述する論述を参照されたい。

1*2 形而上学的な専制（metaphysical despotism）という規定は、資本が、身体という具体的な出来事を集合的に締束する秩序たること、すなわち、physical な準位に対して屹立する超越的な基礎をなすこと、に由来する。

1*3 資本制の蔓延に対する組織的かつ全体的な反対措置の代表的なものは、言うまでもなく、マルクシズムである。マルクシズムの教義の教義は、資本制を抑圧と収奪のための機械装置として規定し、人類をその軛から解放することを謳った。ところがこの教義は、解放されるはずの实体を、当の資本制によって不断に締結されなければならぬという逆理を、隠しもっていたとみられる。それゆえこの運動の本質は、資本制に対する「形而上学的な叛逆」と規定すべきものであることになるのだが、それはこの運動が近代という大運動に下属しながら資本制の同位対立物たる亜空間を現出させる試みであったこと、そして、資本がともともかかるとして対峙されるほどに本性上「形而上学的な」形象であったことを、証示するものであると言えよう。

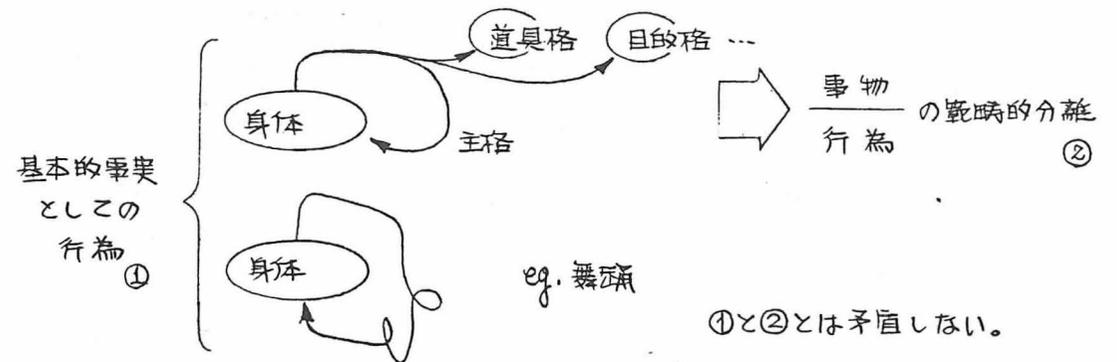
1*4 資本のような、近代のもっとも基本的な社会形象に、主題的な解明のメスを加えられていないという現状は、それ自身驚くべきことである。資本の解明は、第一的には、経済学の準備範囲に属する。ところが一方のマルクス主義は、資本制を実体的論的に批判しようとする戦略範囲のゆえに、資本を独自の形象として描述しようとするだけの積極性に欠けていた。（マルクス主義による資本制批判の瑕疵については、のちに詳しくのべる。）さらにもう一方の近代経済学は、いまに至るも、資本制的貨幣の信用創造メカニズムを組み入れた経済モデルの構築に成功していない。そのモデルはかつてL. Walras によって示唆されたが、その後の集中的かつ持続的な努力によってもなお、完成のはるか手前、満足すべき段階のなお手前にある。

2*5 われわれは歴史の顧念をうしなっていないが、歴史認識というものをなくしている。これはマルクス主義への信憑が絶たれたことと軌を一にするが、その内実は、マルクス主義の用意した歴史認識のための座標系を構成する諸概念が、かえって近代という大運動のなかに埋没し、溶解してしまったということにつきる。したがって無論のこと、マルクス主義の教条への回帰的な信奉によれば、歴史認識はもはや存在しないのである。

（反）資本論が推しすすめようとしているのは、資本の作動とその要素的な構成系へと分解し、それを再び組みあがらせることである。記述のなかで組み立てられたものはその通りではないが、このとき生じているなにがしかのズレが計測のためには重要だ。というのはそのズレの延長上に、資本制の実態が推移していく動向が描かれるからである。もしわれわれが歴史認識を再び手のうちにし、すなわち新たな仕方でも近代の彼岸を望見するのだとすれば、それはこのような作業を通じてである。多分それは、「思わぬ」方向へと伸びていよう。現状の趨勢的な延長や未来予測は、現在が必要とし、現在が不断に生産するものであり、したがって近代に内属する表象、歴史認識の反対物、だからである。

2*6 資本は、言うまでもなく、われわれの社会におけるもっとも中核的な作用素であり、したがって社会（科学）の中心的な考察の対象をなすはずのものである。しかるに（資本制的な）資本に普遍的な記述を与えるためには、資本に先行し近代に外在しながら、社会空間一般に内属する諸事実——人間行為の形式的諸特性——に依拠するのでなければならぬ。記号論とは、こうした形式的諸特性の発現を、おもにその純化した形態において扱うものである。社会（科）学に接続するためには、記号論は少なからぬ改作を要するであろうが。

2*7 行為が基本的事実である、とは、われわれの世界をおよそ意味あるものとして体験することのうらには、それらがわれわれの行為と対峙しているという事実が控えていり、という一般的な事態をさしている。知覚などを始め、われわれのする世界のすべてが行為振子にはありえないのである。だが注意しなければならないのは、こうした基本的事実と、およそ出来事に行為とどうでないものとも考えることができる、という二分法の成立とは、矛盾しないことである。後者の二分法は、その根拠を行為の格関係にもっている。巨[1979]の「行為の格理論」をヒントにすれば、棒や柵の実をとる動作などは、棒を道具格、柵の実を目的格……などとして配置するような空間的な図式のうに組立られている。ここで棒や柵の実は、身体（の所作）と同様に、行為をなしたたせる諸契機であるのだが、ただその格関係のゆえに、身体像から放逐されて「外果」に属し、物体としての存在性格を結晶することになったのにすぎない。



粹きけのような事物は、ときに視られときに触れられ、……その折々に応じて行為に参入する限りで、あるいは行為と相関するのみで、ようやくその存在をえている。そして、いかに多様な行為と相関しうるゆえにかえって、個々のどの行為に対してモ外在するものとなったのである。

2*8 行動主義は、行為を行動、すなわち生物有機体(organism)の反応であると規定した。反応(response: R)に関する因果的な説明を与える目的で、刺激(stimulus: S)は操作主義的にコントロールされる。有機体の内的過程は捨象し、あるいは操作的手法続きと結びつかない仮説有機体を想定しないという規準のもとで等閑に付される。(こうした因果分析モデルが、一般に、言語の説明に有効でないという事実は、つとChomskyによるBloomfield 批判のなかで示された。) 行動主義の説明のなかでは有機体は、多様な刺激の束と多様な反応の束とも結び散らした回路の渦となってしまう。それ以上行為ないしは行動に関して積極的な主張をなすような理論的言明をうみだすことはない。行動主義は、反応を行為として形式的に記述する適切な枠組みをもたないまま、環境(S)をコントロールするのであるから、ともとも語個体のあいだで交わされる形式化された語反応であるはずの行為を、観察するチャンスさえないわけである。(生成文法モデルは、その前提において行動主義から影響を受けた部分が多々あり、行動主義のモデルとの間に類似もみられる。ただ頭首に異なるのは、①理想的な発話者(ideal speaker-hearer)とは、生物有機体と直接何の関わりもない、文法的規則の集積であり、②理論的な説明の対象(理論の外的規準)は、とくにコントロールされないままの語個体の相互作用のなかから採られた資料である、という2点である。このことにより、Chomskyは、ひとびとの相互作用のなかに陥り、その相互作用を支配する**現象的な形式性**——言語にとって**文法**——をさぐりあてているのである。)

これに対するに**主観主義的な議論**は、行為とは別に、あるいは行為に先立って、その動機であるとか、目的、思念された意味であるとかを想定する。行為とは、行為主体の心的内容——**企図・思念・欲求・……**——が**外的に展開されていく**ときに生ずるものなのだ。したがって行為は、その**企図や動機を理解**するときに、もっともよく説明されたことになる。行為は、理論のなかで、それとは別のなにかあるものに代置されてしまっている。

3*9 行為にまつわる制約のうち、それを欠くともはもはや問題にしている行為は行為ですらなくなってしまうような**規定関係**のことを、ここで**現象的な形式性**とよんでいる。これは、あるタイプの行為と別のタイプの行為とを区別して、その一方を抑制する場合とは異なる。(例をあげれば、道を歩くのに両足を交互に前に出すかどうかは前首にかかわり、右足を歩くかどうかは後首にかかわる。)

3*10 Saussure以降に展開した記号論の主潮流は、言語研究の分野をなしとけられた成果を、それ以外の対象領域へと拡大適用(extrapolation)する努力とともにあった、とみられる。ここでの問題は、そのような拡大適用がどのような正当権をもつか、である。Lévi-Straussの<構造人類学>は、この点にしまりに神経を費しているが、その正当権が弁証されたかどうかについては要論をとなえるむきもある。それ以外の記号論的な試みのなかには、方法論上の根拠についてほとんど顧慮しないような議論も少なからずまがってさしている(→橋爪[1982c])。

3*11 Saussureはこれを、言語の**線状性**(linearité)として指摘している。

3*12 言語記号の**統辞論的**(syntagmatic)な配列を解明する作業は、文法理論の介担である。文法理論が解明の対象としているのは、さしあたり文(sentence)までであり、それをこえるつらかりは視野の外にある。そして文は、音声器官を通して発話するの**いくばくかの時間**を要し、**線状の記号列**として符号化するべきものではあるけれども、むしろ**線状である**というより**空間的な内部構造**をもつものだとみられよう。文の空間的な構成は、格関係によくあらわれている。格関係を文の生成装置の中核に組みこんだ文法理論として、**格文法**(Case Grammar)があるが、これをみると、**深層格**(表層の格関係におきなおされる以前の格)の段階では、記号列が**線状**にたつらなるという制約は**いささかも本質的でない**ことがわかる。他の文法理論は多く**線状の記号列**に関わる規則(のみ)を含み、それらの上で定義される格の概念をもちけれども、そうした**線状性**は**外見のもの**であって、すくなくとも文の**範囲**までであれば**時間的=線状的に展開しない**限り**衰な**わってしまうような**契機**は**みとめられない**、と**言っ**てかまわないだろう。

3*13 Chomskyによる一連の定理は、これを証明するものである。註2*8も参照。

4*14 ある秩序が存在することの**有力な証拠**はしばしば、それに関わる**違反や障**碍が**みとめられる**ことである。そのような違反や障**碍**は、秩序の欠在として**概念的に把握**するしかないものであり、そのことを通じて**当の秩序の存在**をば**逆照射**するものなのだ。ここでの**バ**た行為連鎖に、その諸要素間の**統辞的**(syntagmatic)な関係にかかわる秩序が存在すると信ずる理由のひとつは、**精神病**と一括される**精神症状**の多くが**じつは**その種の障**碍**であると考えられるからである。

行為秩序にかかわる**潰乱**としてみたとき、**精神病**の障**碍**は、後述する**失行症**の障**碍**と、**犯罪や違法行為**など**社会的なルール**にかかわる違反との、**中間に位置**するのではないかと思われる。(精神症状は、いくつかの**類型**に**い**ちおう**下位区分**しうるものの、**実際**にはむしろ**とりとめ**ない**病象**の多様な**ひろがり**をなす**べき**ものであること、またその**病象**の**前景**は**幻覚**や**妄想**など**知覚障**碍・**思考障**碍で**占められ**、**画面**の**い**みで

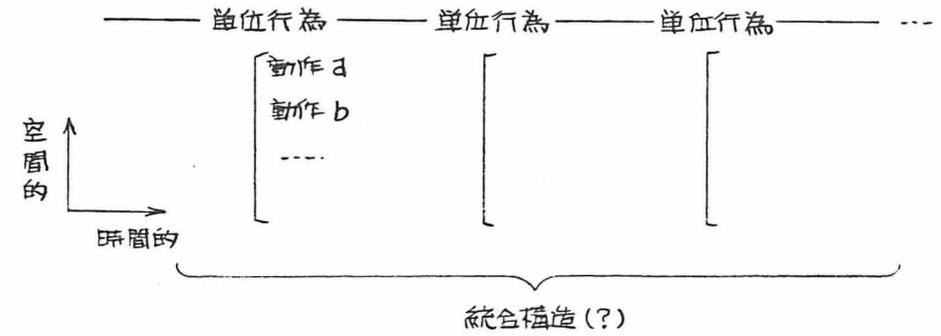
の行為の障礙としてどこまでおさえられるか留保の余地があること、はひとまず措くとする。) 社会的なルールに違反する行為の場合には、それ自身が行為として成立するための条件にはこれといって欠けたところがないのに、それが他の人々の一連の行為と均衡裡に成立するための条件が欠けているために、社会規範によって排除されるべきものとなる。それに対して、精神病に付随する行為障礙の場合には、行為の適格性を保証するはずの要件のどこかに欠陥が生じているとみられる。(現在の症例分析と行為理論の水準では、この行為の偏倚を実証的に明らかにするのはまだむずかしいが。)

4*15 格文法のアイデアを行為分析に活かす試みである‘行為の格理論’などは、その有望な一例である(→頁【1979】)。

4*16 失行症(apraxia)の多様な症例は、通常一塊のものともみなされやすい行為がどのような組成をもつものかについて、適切な分析的描像を与えるための手掛りとなる。詳細は別稿を参照いただくとし(→稿【1979/1980】)、ここで必要な限りの論点をのべておくと、第1に、器質的な損傷にもとづいて、自動化された行為が脱落しうること(逆に言えば、要素的な行為の一系列が習慣的に自動化する、というメカニズムが存在すること)。第2に、器質的な損傷に由来する身体図式の解体にもとづいて、構成行為とよばれる型の行為が障礙されうること。前者は、一連の動作のイデオムの如きものであって、それ自体時間的に展開するにしても、自動化によっていわば‘点’にまで圧縮されている、と云うことができる。後者は、身体図式を準拠とするはずの、行為の空間的固定位の障礙である(身体図式そのものは、行為の反復のなかで獲得されたものであるが)。いずれにせよ、失行症が障礙をもたらす行為秩序は、発話にならざるなら、語彙もしくは単文と似た程度の、さしわたしのごく短い連鎖にしか相当しない。したがってそれらは、行為の格理論のような空間的な接近によって対応できる範囲のものである。

われわれの言語は普遍的に、動詞という品詞をもっている。(これは、どの文にも必須のものであり、この動詞を焦点として格関係がはかれる。「走る」「うなづく」「笑う」……等々の動詞は、われわれが自他の行為を類別し、認知し、了解する基本的な枠組みを提供するものである。この事実は、われわれがちょうどこうした動詞(ならびに動詞を焦点とする(深層の)格関係)にみあうかたちでわれわれの動作を切断し、分節し、切りだして、単位行為へと組みあげているのではないかと想定してみることができよう。

行為連鎖の間隔を小さく絞っていくと、単位行為とよぶべきものに到りつくだろうが、これ自身、身体肢節の各部位の運動を前提とする、かなり細かく分節された状態である。そこで便宜上、各肢節の動きを動作とよぶことにすると、一般に行為連鎖はつぎのような構成をとる:



4*17 より長大な行為連鎖を分析するのは困難であるのは、行為がその内在する形式的な秩序を純粋に展開する度合いが急速に薄れていくようにみえることが根本的な原因である。行為の統合構造は、あったとしても、行為連鎖をそのすみずみまで規定するようなものではあるまい。行為は、第1に、行為の対象や素材との規定関係にはいるし、第2に、他の行為と相互に規定関係にはいるからである。(これらの事情は、文法理論が、文と文との談話分析や、物語の分析に、すんなり延長できない事情と、通ずるところがある。)

4*18 行為を行為たらしめる形式的な諸条件(のうち、特定の社会の特殊性に依存しない部分)を、とくに‘規範’とよんできた。これに対して、‘社会規範’とは、特定の社会が行為を行為として是認する場合の形式的な諸条件(のうち、特定の社会の特殊性に帰すべき部分、あるいは同じことだが、‘規範’ではない部分)をいう。

4*19 記号論は多く、Saussureの「恣意性の原理」を踏襲している関係上、実在世界との性急な連絡を求めず、むしろそれを回避する傾向がみられる。

5*20 人間の行為がまったくランダムに展開する、という想定もまたはなはだ非現実的であると思われる。そのような行為連鎖は、かえって、ランダムな判断に対する不随意な反射(だけ)を考えるとこのような、十分にコントロールされた状態を想定しないと実現されない。人間の行為連鎖のうち、ごく一部分が厳密に形式的に特定されており、またごく一部分がきわめてランダムであって内在的な秩序をもたず、のこる大部分は両者の中間状態にあると仮定することが、もっとも自然であり、またわれわれの目的にも適ってはいよう。われわれはこのうち、行為連鎖が一定の規則性をみだして配列されている場合に関心を集中し、そのような行為連鎖が実現するための条件はなにか、そのような行為連鎖はいかなる原理によって統合されているのか、を明らかにしようとするものである。

5*21 行為が自由であるとは、人間の身体各肢節の動作が十分に分節されており、随意に

組みあわせうるものであることをいう。もちろん生理的・物理的な制約のほかにもとづく限界というものもある。しかしそれを除けば、それまで継続されてきた行為の連鎖によって、みきつみき生ずる行為が（なにか自然法則のごときものによって）決定されてしまうと差えなければならぬ。積極的な理由はない。

5*22 行為に関する主義主義的な理解とは、それを、企図であるとか、何か行為とは別個で行為に先立つ心的なプロセスに解決してしまえるように発想することである。こうした理解によると、行為連鎖とは、あらかじめ企図された行為プログラムをたんに身体肢節の動作のなかに順次具体的に実現していくだけのプロセスである、ということになってしまう。こうした理解では、行為者の自由は行為に先立つ企図設定の際にだけあり、いったん企図が確定され行為がスタートしてしまうや、行為者と行為する身体はひたすらロボットのごとくその企図をなぞり、その企図に奉仕するものとみなされる。行為のプロセスに介入するものはなにごとによらず、行為の企図を破壊するものであり、行為に外在する行為の反対物であることになってしまう。

しかし、行為とは、つねに行為の現在のなかで展開してゆくしかない、1個の事実性としてある。行為を中断したり別のものとしたりするような恣意の可能性もまた、行為の現在につねに帰属しており、行為の自由の不可分の一契機をなすと言えよう。そこで、こうした恣意を発動しないという思念の持続的なありかたも、行為の領域に（消極的に）参与するものとして主題的にとりあげる必要がある。これが、思念の自己一貫性にほかならない。

5*23 具体的に言えば、途中で気がかわる、何をしていたか忘れてしまう、とくに意図したわけでもなくとも結果的に行為の遂行と両立しなくなるような別の行為をおもいつき、開始してしまう、などの思念があらわれなことをいう。すなわち、思念の自己一貫性とは、単位行為 S_0 から S_n までの両立可能性ないし無矛盾性を含意するものである。（ここで思念 E_i は、身体の状態（ないし単位行為） S_i と相関するかぎり問題にされている。）

5*24 複雑な人間の行為一般に関しこの程度の心的権能を仮設するのがよいかは、まだ殆ど着手されてない困難な、それでいて魅力ある研究分野である。文法理論は、同じ論点を、人間の言語行為という特殊な場合に関して、掘りさげたかたちとなっている。ここでの主要な課題は、発話=受話にかかわる心的権能をなるべく特定して、具体的には特定のタイプの書きかえ規則や語彙部門として、文法のなかに組みこみ、それを経験的に妥当な理論につくりなすことであった。行為一般が文法理論の扱つかぎりの言語行為とかならずしも並行関係をもたないことを前節でのバカ、心的権能を程出して形態化をとげるといふ点では、もちろんいずれの行為も共通している。

一般に行為の形態化は、その上位の層（すなわちより大なる行為の自由と対応する

層）では、相互行為過程を通じて確定する社会規範と圧着するようになる。本稿はこの形態化を、行為と相互行為の全体を包摂する社会空間の全域においてはたらく、個々の心的権能にかかわる形而上作用の帰結として考える試みである。

5*25 心的な自己把持 (psychische Selbstfesthaltung) とは、反射や運動要素やその他さまざまな内的・外的攪乱要因に抗して、行為を自律的に展開している場合に背後に想定される心的権能のはたらきをいう。奥ゆかしい言ひ方をすればこれは、ひとが何かある行為をしているとき、"ジアンハイマコレコレ/行為ヲシテイルトコロナツ" とどこかで考えている状態にあたる、と言ってもよいが、別に必ずしも意識的な状態やいわゆる意志に限ることなく、ただ集中が持続するという事実的な過程の抽象をも念頭においている。

5*26 心的な自己把持が顕達され、維持される代表的な場合としては、(i) 自己把持への強迫的な固執による、(ii) 相互行為の系列が安定的に推移して、ついに儀式的のようなものへと転化する、(iii) 行為の反復が習慣化し、慣習化して、ついに習俗のようなものへと転化する、(iv) 宗教的な戒律や、後述する資本制になど、空間を特定の形而上学ないし形而上作用がおおひ、といった場合があげられよう。

心的な自己把持とは、まとまりのある行為がそれとして実現するための原因（たとえば、企図）としてたてられているものではない。そうではなくてそれは、まとまりをもって展開する行為の底に流れる通奏低音、行為の条件をととのえるためのもの、である。

6*27 技術、行為の純粋形式、組織体——これらはもともとその原理において区別すべきものではあるが、それが具体的に実現される時には互いに重なりあうのをさげられない。資本という作用も、後述するように、技術と組織体との重層的な展開のうえにある。

6*28 自然的な秩序とは、通常にいう自然法則の名のもとに念頭におかれているような秩序のことをいう。自然的な秩序と社会的（もしくは文化的）秩序とを区別し、対立させるのは、構造主義的接近のもっとも基本的な出発点をなす。"記号空間論"の構成においても、諸々の事態を成立させる作用因に、大別して、自然的な作用と社会的な作用とのふたつをみとめている。（後者はさらに、<性>、言語、権力、の3つの作用に下位区分される。）

6*29 行為の手段である事物は道具であり、行為の対象となって変形をうけた事物は加工品である。道具は通常、それ自身がふたたび加工品である。この回帰的 (recursive) な関係によって、行為はそれ自身および他の行為へと複雑に相互関係しはじめる。事

物(加工品)を通じた行為と行為の相互関係は一方的であるので、本質的に言って時間的な性格を帯びる。すなわち加工品のたぐいの事物は、それを定在させるためにかって生じた行為(の系列)の集中的な帰結、いわゆる過去の集積回路として、行為の現在を規定する。

6*30 技術が違反することのできないのは、行為する身体や行為に関連する事物を含めて物的世界に貫徹する自然法則である。この否定できない事実を眼を奪われると、ひとは、技術を行使するにさいして発揮される意志の余地などわすれかたであり、要するに技術として発現する行為秩序の主体は自然的秩序にほかならないではないか、と考えてしまいがちである。だがこの結論は、はやまっている。行為を通じて事物(加工品)のなかに刻まれ、事物(加工品)を通じてふたたび行為をも規定することになるのは、ほんらい自然の反かに根拠をもたない形式性、人間に固有の表現=行為にもとづく形式性なのであって、このような回路をとらって、技術は、行為に固有の特殊な行為秩序をも再生産しているのである。このように技術が実現する行為秩序は社会的(文化的)なものである。技術は、自然的な秩序と社会的(文化的)な秩序とのちやうど重なり目を縫うようにして、自らを展開させる。

なお、身体それ自身も事物であることにもとづき、(自己の)身体を手段的に行使し、あるいは(自己の)身体に対象的に関わりようとする行為が、技術として成立することになる。いわゆる身体技法がこれである。身体技法が、行為する身体の外にむく物的定在をうみださず、もっぱら身体それ自身への自己関係へと純化するとき、行為はつきにのべる行為の純粋形式へとかぎりなく近接してゆく。

6*31 行為論としての技術論は、ほとんど未開拓の研究分野である。

行為はこれまで、行為そのものとしてではなく、行為を支える全図として、あるいは行為の固有な秩序を捨象された有機体の反応として、考察されてきた。しかし、行為の実態は、そのいずれでもなく、行為秩序をなしたたせる固有な形式性(formalité)にこそある。行為するものの思念や、行為について言表することのなかに明瞭判断と姿をあらわすことのない、語られざる行為の領域というものがある。(行為を特徴づける技能、たとえば自転車に乗るといふような出来事は、それについて考えることも語ることも区別される、行為それ自身の領域にあるように思える。)行為をかたちづくる形式性は、思念を(相対的に)はなれ、身体それ自身のなかに蓄積されるしかないようなものなのだ。

こうした行為を對象化し、記述する作業自体が、すでにひとつの難問である。ひとつの手掛りは、行為の格理論が想定するような行為と言語の並行関係によって、行為への言及可能性、行為の言表可能性が(一定範囲で)成立するのではなから、ということだ。(この論点については、さしあたり巨[1979]を参照せよ。)

行為についての固有なまなざしを支えられた技術論は、技術史と行為秩序の展開史

として再構築することを、重要な課題とする。資本という近代のもっとも重要な社会形象を解明する作業も、こうした技術論の新たな展開の先にあるのだ。

6*32 言語にかかわる行為がどう位置づけられるかが、ここで問題となる。発話行為としてあげれば——書字行為ないし書記行為は、発話行為に対しては派生的なものである。それ自体として興味ぶかいのではあるが、ひとまずおきましょう——たしかにこれも、身体が自分自身に関与して一定の形式性を発振しようとする、行為の純粋形式としての要件をそなえていよう。ただ、発話行為の場合に特殊であるのは、実現されてゆく行為の形式に、それとある指示と表現の機能が託されており——これを可能にしていけるのが言語規範である——、そうした二次的な機能を担うところに発話行為の本質がかかっている、という事実である。

言語が美的な形象につらなるためには、それゆえ、言語本来の機能が括弧に入れられ、それ自身の純粋な形式性(たとえば、韻律)へと引っ込んだりせざる必要がある。言語が機能的なものと美的なものとの間でつねに一定の揺れと振幅をもって序圧しているというのは、普遍的な現象であり、どの民族やどの文化も共通の詩形式——美的な言語形式——をそなえているのである。(詩的言語に、発生期の言語がもっと信じられるような特徴性を付与しようとする試みに対しては、慎重でなければならぬ。)

6*33 美とは、形式的な関係(が有機的な身体の生理などとは無縁であること)、あるいは、形式性と規範とのあいだに交わされる響鳴と不交鳴、のなかで生じる。美的な行為を動機にすかのぼって理解しようとし、「美的な欲求」を仮設したりするのは、美的現象の本質への接近を怠った、無益で愚かな試みである。(なぜなら欲求という概念は、欠乏と充足への志向とだけを含む無定型な概念であり、その欠乏が美的なものによって充足される限りならぬ必然性を、同語反復以上に語りえないからである。)

6*34 行為の純粋形式といえども、行為としては、物的世界のなかで実現されていくしかない。したがってたとえば、音楽であれば楽器のような物的な演奏手段を用いるのがふつうであるし、挿画であればそれを定着させる画材が必要となる。このように考えるとき、美的な行為ものこらず、技術としての性格をおびてみえてくるであろう。それはたしかであるが、肝腎なのは、美的と称される行為のなかにこそ最終的にはそうした素材の物的性格が無化されるように行行為が形式へと照準する、という事実である。

行為の純粋形式はしかし、その展開のなかで、物的な素材にかかわる技術の論理から、ますます多くの負荷を課せられるようになる。とくに、複製技術と媒体の発達が演奏(表現行為の現在)を蚕食する歴史的プロセスは興味ぶかいものであるが、痛を改めざるをえない。

6*35 行為が他の行為をどのように自ら構成要件となし、相互に縛りこみあうかは、やはり興味ある。しかし未踏の、研究分野である。（「構成要件」の用語は、刑法学の犯罪分析論から借りている。）ひとつの可能性は、一オの行為が他オの行為を対象とすることである。（厳密には、対象とするのは、行為の産物や行為する身体など物的なものにすぎぬ、と言うべきかもしれない。）バツの可能性は、一オの行為が他オの行為を前提にする（あるいは、互いに前提としあう）ことである。（たとえば合唱）。その他に、他の行為を目的とする、手段とする、……などといった関係が想いかばられよう。これら相互に絡む行為がどのような相互関係におかれてあるかを厳密に記述する作業をすすめると、協働行為の様態を概念的に確定できるのではないかとみこまれる。

6*36 組織体を、相互作用の直接性に結びつけて規定するのは適切であろうが、次のような誤解と結びつく可能性がある。すなわち、組織体は互いにか命令や暴力のような直接的な作用によって形成されているのではないかと、とする誤解である。（命令は、一オの意志を表明できる、言語のもっとも基本的な性能のひとつであり、たしかに組織体のなかでは不断に見出される記行為である。）だがよく考えると、命令や暴力は、局所的な波及をかたちづくるにすぎず、局所的に安定な諸身体の相互関係をかたちづくるにはいたらないものである。（命令がつねに実効的であるためには、全球的に作用する権力の保証が必要である。）

6*37 協業系とここでいうのは、狩猟のための集団や、親族組織や、軍隊や、……のよう。特殊目的のために空間の局部に増集して協働行為する（ことのできる）身体の集合的な編成のことである。協業系は、分業系と相補的である。分業系は、いかなる増集の形態とも無関係に、空間の全域に散在する行為が、相互に制約しあう事実を概念化するものである。行為の相互的な制約は、主要には、事物（加工品）の移転（ないしは交易）によって担われるのであるが、市場はその発展した形態のひとつである。（すべての社会が普遍的にこのような事物（と言語）の交流の回路を内蔵しているという前提としては、ついに Lévi-Strauss のものが有名である。）

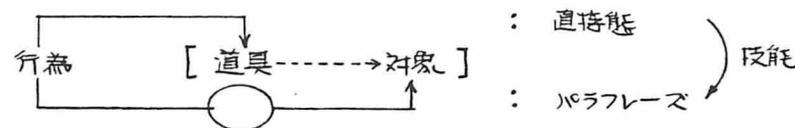
6*38 間接に、とは、分業系を介する意である。

もともと生理的な必要とは関係なかった行為でも、職業化し、食糧など生計手段を獲得するための手段に転化すると、その段階で、その行為は労働としての規定をうけとることになる。分業系（ないし市場）は、生理的な必要という実体的な項にもとづくものである労働を、行為の相互運限のなかで相互に転写させ、非実体化する装置としてのたらしませもつ（ことがある）。Baudrillard の指摘するような消費社会の現段階は、このような非実体化が十分進んでおしすすめられた帰結であると言えよう。

7*39 道具系の首領の支配形態として、Heidegger の用具運限の考えをあげておくべきだろう。ただし、彼のいう「運限」は、配慮のなかでのつながりであり、ここで考えたいような出来事としてのつながりとは異なっている。

7*40 道具とは言うならば手の延長であり、足の延長であり、……、労働に必要な身体肢節の運動性（の補助手段）を、外的な事物の物的性能のなかに外置したものだ。それらは依然、身体のコントロールによく従っている。すなわち道具はいつた人行為の対象とされているようにみえようが、それはその行為によって道具がいわば企図づけられ、行為の存続の対象へと向かうためにほかならない。

道具系は行為に、複文的な統合構造をもちこむ。これどうまく作動させるためには、技能が必要である。



7*41 機械が道具から区別される場合、ふつうは、材質であるとか、部品の数や組立ての複雑さ、作動の原理（ことに動力源の有無）などがメルクマールとされる。（道具をつかって作るものが道具、機械を使うものが機械である、という規定もあるが、この定義では同語反復となって区別の根拠を明らかにできない。）これに対して、ここで提起してみたのは、行為論にもとづく両者の区分、すなわち、行為秩序の内部で当の事物がどう位置を占めるかにもとづく区別の試みである。（之れゆえ、ここで区別されるのは、道具系と機械系である。）このさい、事物の組成は、両者を区別する積極的な手掛りとはならない。

たとえば自動車は、ふつうは機械として扱われ、道具とはみなされないだろう。しかしユーザーがそれを下駄代わりに使って、もっとも移動の用に使しているのだとすれば、それを道具系のなかに位置する道具とみなしてもかまわないことになる。（もっとも自動車を生産する工程のほうは、機械系であろうが。）これに対して、工場をフォークリフトを運転している場合を考えてみよう。彼のしていることは、先ほどの自動車ユーザーと大差ないかもしれない、しかし彼の行為は、かならずしも彼のあずかりしらないより全体的な輪郭のなかの、一部分なのである。すなわち彼は、このときある機械系に下属していることになる。

7*42 機械系の行為論的な実態を形式的に記述する作業は、こゝまたつぎの興味をさそうテーマである。その素材は、産業革命史、あるいは工業史のなかに、豊富に埋もれている。

道具であれ機械であれ、労働過程のなかにはいりこんでくる事物とは、既往の行為

の集積態にほかならない。(言うまでもないが、加工品たる事物は、その原料たる自然的素材のうえに附加された、既往の行為の収斂する形式性において存在している。→橋爪[1977]) こうした事物とは、既往の行為が、労働する行為の現在に到達し行為を制約する仕方ののである。

いわゆる機械は、動力を内蔵していることを限りに、人から離脱し人間の行為連鎖を下属せしめた。このように臣制的に行為の現在へ到ることが、機械系のひとつの特徴である。最近、自動化がすすみ、いくつかの工程ではまったく人を置きないうまでになった。これらは機械系であるが、もはやたどりつくべき行為の現在をもちないうかにみえる。しかし行為の現在は、決して消滅したわけではなく、分業系のなかを別の工程へと押しやられただけなのだ。

7*43 組織体は協業系として現象するのだから(前項)、機械系は協業系として人々の身体を編成することになる。

協業系は、かならずしも機械系であるとは限らない。協業とは、大きな石をもちあげるときのように、複数人間が互いの行為を同調させる場合に生じてくる。こうした必要は、技術の構成が貧弱である場合にも(いや、その場合ほど)おこりがちである。

機械、機械系および組織体の関係は、これほどストレートではない。いま、まったく一人でこなせる技術があったとして、彼がその一工程を「機械」化したとしよう。この機械は彼のコントロールに十分服しているのだから、ここでの想定ではこの技術はいぜん道具系のように展開している。ところが同じこの機械を高率で回転させなければならぬという事情が生じ、24時間操業に転じたならば、もはや彼ひとりではこの技術を維持できない。そこで人が交代するとするならば、その場合には、各人の労働——そのおのおのはこの同一の機械を含みこんだ道具系としての行為秩序を展開している——は協業系として束ねられているのであり、人は組織体としての実体をもったことになる。

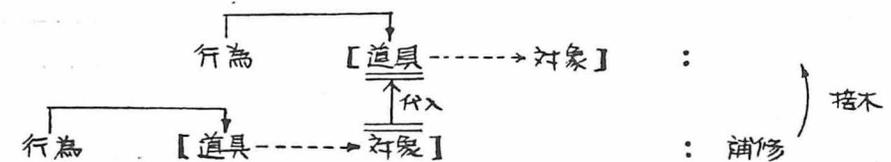
7*44 資本というなら経済学ではいつう、土地(land)、労働(labour)と並んで、生産要素のひとつであるという位置づけをうける。ここの概念規定も、その区分を踏襲している。すなわち、土地は、経済活動によっては生産することのできない耐久物のすべてであり、労働は、労働者が生産工程で投下するサーヴィスであるのに対し、資本とは、経済活動の産物であって再び生産工程に投下されるもののうち、一定の期間をもちこして存続するものをいう。資本は、生産的用途を提役するような、事物なのである。しかるにこの事物は、ゆくとち1期まてまでの、過去の行為によって変形を施されたものである。たとえば土地が、開墾の成果である農地として存在するとするならば、その限りではそれは(正確には、(農地)-(土地)として表現されるべきであるような、定在する形式性^{フォルム}は)、資本であると言える。

このように定義される資本は、取の区分のひとつ(資本財)である。これに対して市場において概念規定されるような資本、すなわち、資産の(とくに貨幣の)自己増殖をめざす運動というものがあある(G-W-G')。前者は、市場の概念を前提としないものであるので、広義の資本とよばれるべきであり、後者は、狭義の資本とよぶべきものである。広義の資本は、行為論の水準で、狭義の資本は交換論の水準で、定立されている。

7*45 行為者が行為秩序のなかで主眼的な位置にたち、道具などの行為手段をその支配下におくというのは、自明の事実であるようだが、表象や心像のなかではその関係は容易に逆転しうる。一般に道具が保つと信じられる、呪術的なマナ(威力)の観念には、行為秩序と物的世界の秩序との神秘的な親和性が託されている。その観念のもとでは、行為者は、両秩序の媒介者たる行為手段に奠かいて、彼の行為を展開できるだけにすぎない。

技術的制約のなかに行為が特定の形態に固定する傾向がある場合には、このような主眼部の移転が生じうる。資本体のような行為の集積的秩序のもとでは、それはさらに大きな可能性になると言えよう。

7*46 資本が自らを更新するとは、もっとも単純には、道具や機械が壊れた場合にそれが補修されることをさしている。道具や機械を補修したり、あるいは改めて造りなおしたりする作業は、明らかに、その道具や機械を行為手段として展開される作業とは、異なる系列に属する。(同一行為者がその場で手早くすませてしまう場合には、なかなか区別できないが) 行為手段を補修ないし生産する行為連鎖は、もとの行為連鎖にいわば接木されている。



接木の幹にあたる行為連鎖と、枝にあたる行為連鎖とは、その回転が異なっており(定義上、補修は毎回必要なのではない)、その両者の連帯の仕方から、「資本が自らを更新する」という自己運動的な外見が生じている。

資本の補修や、再生産に関わる行為連鎖の接続関係は、分業系の相互連関を構成する重要な1契機である。資本の代入が市場における交換を通じて実現されるならば、分業系の相互連関は市場取引にその表現を見出す。

7*47 '資本体' という concept を形成するねらいは、もちろん、資本論を商品論とし所有論として構成するのではなく、行為論として構成したいからである。

『資本論』の構成においては、資本制の基底は、

$$G-W \begin{cases} P_m. \\ \dots \\ A_r. \end{cases} \dots W'-G'$$

という有名な式式においてとらえられる。生産過程をとりたてた形態的な諸相徴は、商品諸戦場からなるこの式式の組み立てのなかに、全て解消されてしまっている。行爲論として記述しようとする資本の現象形態は、私的に所有されている資本の私的な空間の暗函のなかに、いわば内装のものとして隠されてしまっている。

Marxが資本のこれ以上の行爲論的な究明へと向かわった理由は、ひとつには、彼が資本制批判を価値論、すなわち商品諸戦場のうえに演繹的に構成される搾取の理論によって、十分に遂行できると信じていたためであり、もうひとつには、資本制下ではすべての労働形態は単純労働へと分解をとげるのが必然的なプロセスであり、単純労働は互いに文脈づけあうことなく生産過程のなかで任意に結びあわせられると信じていたためである、と思われる。しかしこの双々の妥当性について、われわれは留保を付すべきであると考えたのだ。

マルクシアズムの式式にもとづく解放の実践形態は、行爲の秩序に関するアモルフな混乱状態——すなわち、利潤動機や賃労働契約から切断された遊離身体の無規範状態——と、それを鎮圧するための権力体の遊離——兇暴衝刺——とをまねいた。このような解放の概念規定を解除するために、資本体の概念を、資本制の商品関係以前に、といどころか市場の外に、掘てる必要がある。

市場の外に資本体という概念を掘ると、新石器革命以来の一般的な生産形態である耨耕を、どのように規定すべきであるかが問題となる。農地は、註7*44でのべた11みで資本であるか、機械装置ではない。農地は、その共同利用をめぐって、組織体であるか所業系であるかを生産させるであろうが、一般的に言ってそれらは束ねられた道具系の水準にあり、機械系と言えほどのものではない。(奴隷制大農場経営であるとか、資本制の大農場経営であるとかであれば、その限りでないかもしれぬ。) いずれにせよ、技術上の要請を機械系として実現するところに生ずる組織体だけを、資本体と考えよう。

建物や城郭のような、共同利用に供せられる建造物(加工品)のたぐいも、同様に考えられよう。それらは農地の場合と同様、その上に集約的な行爲形態を養生させようが、それらがただ単に束ねられた行爲連鎖であって、生産にかかわる技術上の必要を具体化するものでない限りは、資本体として概念化しなくてよいものである。

8*48 採算を下回って操業しつづける資本体は、資本体を構成する資産をつぎつぎ埋没とせざるをえず、早晚分解を余儀なくされる(倒産)。それゆえ資本体はつねに、採算を上回る方向へ、すなわち利潤へと志向するように、運動する。この志向性は、市場で相互に接続しつづけるなかで集約的に自らを再生産させる資本体が、共通にしたがうべきルールなのであり、このルールが描きだす能動性を1個の主体性として解する

ところに、資本体の利潤動機が結ばれるのである。資本体という集合的な過程は、二つして有機体的な解釈を許すものとなる。Marxの体系にいう「資本家」とは、このような動機をあてがわれた機関である、と考えなければならぬ。しかしマルクシアム主義は、資本体の運動もしくは資本家の実体視に(いくぶんか)とられ、それを脱主体化しようとはかったのである。

8*49 周知のように、初期の商業資本の運動形態は、奢侈品などの投機的な交易を主体とする冒險的商業であった。

8*50 このような陳化の内実としてふつうに語られているのは、いわゆる経済外的な強制である。それらは、(近代的な)所有権、たとえば処分権の全面的な委動を各人に許すものではなく、事物と人間の取組である資本体を、利潤へ向けて技術的可能性に即して再編していく自由を保証しない。

8*51 産業化は産業革命とししばしば結びつけて語られるが、ここではむしろ経営の合理化を念頭においている。産業革命の技術的成功は、かえってこのような経営の合理化によって支保され、社会的に受容され波及していった。

機械系の構成素たる行爲連鎖の断片を互換的に提供するのは、共同社会から剥かれてきた遊離身体である。もしも機械系が、行爲連鎖の断片ではなくてその全幅を、互換的に下層させてしまおうとしたなら、それは奴隷制的な資本体の構成であり、産業化とは相反するものだ。この構成にもとづくシステムは、後述するようないみでの生産と消費とをそのシステム内部で対照的に定立することができます。生産と消費とを市場を通じて連携することもできず、市場のもとで資本体を拡大させていくこともできなぬ。

8*52 資本体の構成素が、労働力を含めて、のこらず市場において入手可能となることが、ここで重要である。それらに価格が付与されることで、収支計算と利潤の算出が可能となり、各種要素を採択し廃棄する基準もまた与えられるのであるから。Weberの百端する計算可能性は、このような資本体各部の互換性の成立と照応する。

8*53 前資本制的資本は、商業資本(G-W-G')もしくは貸付け資本(G-G')の形態をとったのに対し、資本制的資本は、賃労働用役の使用にもとづく価値増殖過程を含むものである。とMarxは規定する。われわれはそのマルクマールとして、①賃労働の成立、②機械系が資本体として自己運動すること、の2点をみておこう。

なお資本は、集合的に性格づけられるものであることに、注意しよう。かりにある業種(資本体)の全工程が自動にされたとしても、その業種が賃労働に依存する他業種と結びついている限り、資本制的資本の諸性質はいささかもうしなわれぬ。たとえば「搾取率」の如きは、全業種を通じて、当該業種についても算定されるのである。

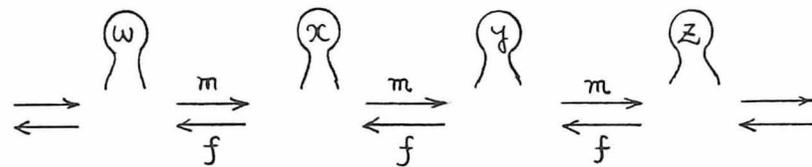
8*54 資本制の貨幣形態については、第4巻で詳しくのべる。

8*55 資本制下では、資本市場が成立しており、貸付け手段としての貨幣をめぐる競争的均衡が成立する。こうして成立する利率は、全域的に、資本対利潤の比率を平準化するものだ。

9*56 推移性(transitivity)とは、2項関係(binary relation)に課せらるる公準のひとつであって、つぎのように表現できるものという：

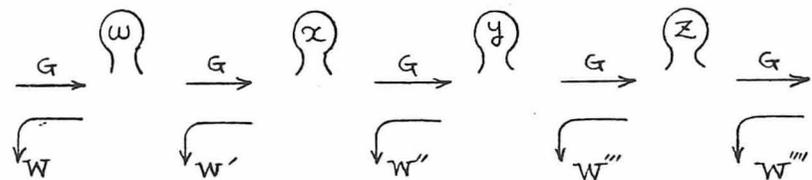
$$x \circ y \text{ かつ } y \circ z \longrightarrow x \circ z$$

たとえば、実数上の大小関係(\leq)などはこの例である。交換の推移性とは、それ以外の交換が、他の交換を前提とした帰結とする、双方向的な波及の網の上にあることという。たとえば、いま x と y との間の取引に注目してみよう。男財(m)/女財



(f)の間の儀礼的交換のような場合であれば、 x から y への m の譲渡は、 w から x が z を受け取ったことの帰結であり、 y が z に m を譲渡することの前提である。しかしこれは、取引 $x \rightarrow y$ に対して、取引 $w \rightarrow x$ が先行し、 $y \rightarrow z$ が後続することを意味するものではない。なぜならば、女財 f に関しては以上の関係は逆転しているのだから、要するに各取引は暗黙のうちに互時的に相互を参照しあうことにより、自分自身を可能にしているからである。このように各取引の個々の成立が、全域に及んだものである権力の、ちょうど線素(line element)に相当する現象とみられよう。

貨幣の場合にも、事情は似通っている。取引は、各人が入票とする実体的な商品を獲得するためのものだが、それを「スムーズに」実現するために、実体的な需要と結

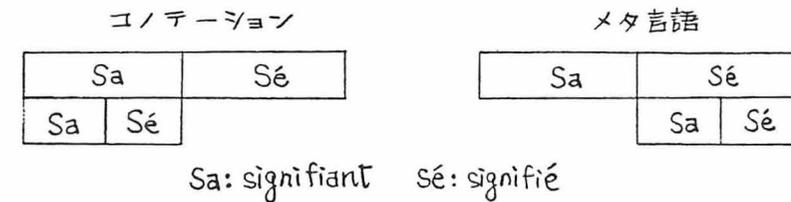


びつかない抽象的な財が、交換の仲介手段が介在する。 x が W' を受領するのは実際 z を入票とするからだが、 y が z とひきかえに G を受領するのは、 z が x からの取引で、 z に受領されると予料されるからである。このように z が w の受領可能性は他の受領可能性によって支えられており、かくして一般的な受領可能性として成立している。また貨幣は、二のこを通じた一般的な支払手段——つまり、 z 以上の支払方法を要求して受領を拒むことが許されないような、最終的な現物性——としての

位置も獲得している。こうして貨幣は、取引 $x \rightarrow y$ において、 x がつきつけるものであると同時に y が要求するものであり、かくして任意の取引に対して現象する全域的な権力作用の効果なのである。

なお、Marxの圏域では、貨幣とは価値論の内部で、使用価値と交換価値の矛盾から上向的に算出しているが、そのような構成は必要でないし、貨幣論にとって本質的でもない。

9*57 ここでは「喩」ということは自体を、ふたたび「喩的」に用いている。もともとの用法として念頭におかれているのは、当然にもR. Barthes [1964]にいう、コノテーションの概念である。



Barthesの議論には批判の余地が多いが、ここで「喩」の名のもとにこりだそうとしているのは、単純な指示作用(Sa-Séの結びつき)の重層によって複合的な意味作用を算出しようとする論理の骨組みである。流通手段としての貨幣には、現物——(より)現実的なもの——の觀念がついてまわる。貨幣は、現に流通する限りで現物としての資格を帯びているのだが、その流通は、流通をいっそう拡大させ貨幣の現物性をますます稀釈させていこうとする一方の契機と、貨幣の信頼性をつねに問題とし貨幣の現物性へとつねにたちかえらうとするもう一方の契機との、拮抗のうえにようやく実現されるようなものである。最単純の場合をのぞけば、貨幣とは、端的な現物(であると信じられているもの)とは区別された、何ほどこは現物性から遠ざかった流通のための工夫なのである。最単純の場合に想定しうる端的な現物性をば、直説の貨幣機能と考えるならば、貨幣機能は一般に、こうした直説のはたらきを含蓋する関係にたつ。貨幣におけるこうした現物性の欠乏は、前項の註9*56でのべた交換の推移性(すなわち、個々の取引が相互に反照しあう、端的には権力的な作用)によって充填されつづけるものであり、かくして貨幣とは、意味作用と権力の工学的仕掛けと規定すべき社会形象なのだ。

9*58 ここにいう派生の系列とは、いわゆる制度史のような、貨幣の歴史的な展開を扱うものではない。〈意味作用と権力の工学的仕掛け〉たる貨幣が、その要素的な諸契機から組みあがる論理的な展開をこそ、問題としたいのである。

9*59 ここでの規定は、貨幣をひとつの空間の作用素とみとめるところから出発している。

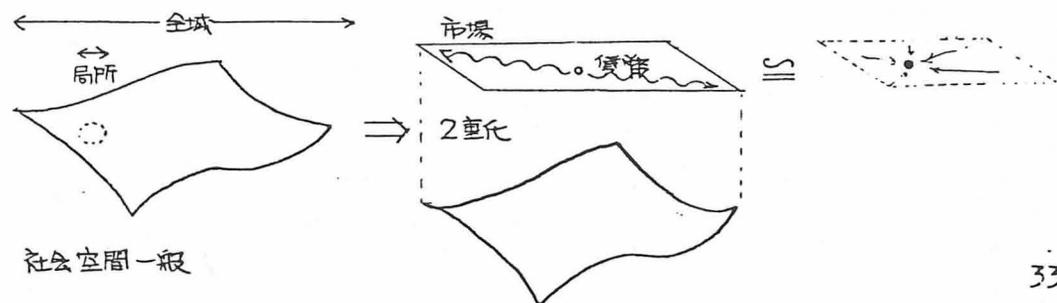
しかし実は、'記号空間論'の全体的な配置運轉のなかでは、この貨幣を、基本的な作用力——自然力/〈性〉/言語/権力——の複合として、本格的に概念規定する手はずである。

9*60 「市場において」という規定句は、市場(market)なるものの概念規定を前提としよう。ここでは、Walrasのいう競渡買市場としての抽象化を許すような、すなわち取引の各当事者が預かかれている具体的な社会関係と彼の実行する取引とが分離できるような、交換のシステムのことを考えるものとす。すなわち、市場にあつては、交換条件が満足すべきものであれば、任意の他者との間に取引可能性がある。ここから交換条件をめぐる競争、さらには競争的な市場価格が成立するのであるし、取引当事者相互の没入性、さらには交換の多方向性が生じてくる。

こうした市場の概念は、古典派以来の正統経済学が自明とみなしてきたものであるため、ことさら言及の要も感じられないかもしれない。しかし、貨幣の本質として特筆すべき貨幣の機能は、実のところ、こうした市場の成立と表裏一体の関係にある。市場があつて然るのち、取引上の工夫として貨幣を説明する、のではない。市場という空間の全般的な編成と、貨幣とつて全域に普遍的な作用系の析出とは、同一の事態の両側である。

貨幣は、交換の規範的な推察性を体現するものである。しかし、New Guineaのte-moka システムであるとか、Samoaの交換システムであるとかのような理想化された交換システムは、市場ではない。貨幣をふくまなければならぬ。こうした非市場的な交換システムでは、スタヤ pearl-shell であるとか、Te-toga であるとかいった貨幣類似の財貨が交換されるけれども、それはいつでも、誰に対しても財貨を請求できる機能をもっていない(→橋爪 [1981b])。

「一般的購買力」であるとは、いつでも、誰からでも、任意の財貨を譲り受けられることをいっている。こうした一般的作用の出現により、空間は普遍化されて、場所論的^{ロカール}な特異性を剥奪される。市場とは、抽象的な空間であつて、各取引主体は互いに隣に十分近接しており、言うなれば空間でありながら広がりをもたない1点と同一視されている。社会が市場としての営みをはじめたときでも、もちろん社会空間の場所論的^{トポロギカル}な存続相はそのまま残存しているのであるが、貨幣の析出とともに空間は二重のものとなり、その一方が市場という抽象的な性質を獲得するのである。

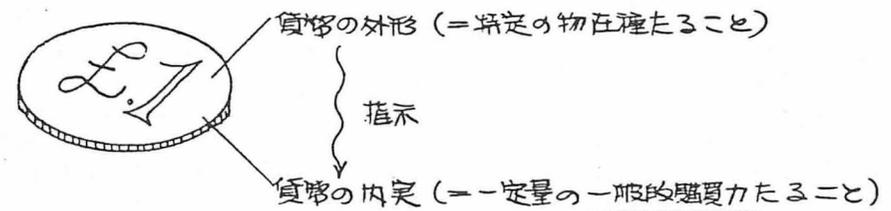


以上のような市場と貨幣の概念把握は、当然にも『資本論』冒頭の構成と有配する。

9*61 素朴に考えると、貨幣は他の物品と同様であつて、そこに定在するだけの物存種であつて、陳列物に陳列されたりするようになるものと考えられよう。そして貨幣が他の物品と区別されるのは、その特有の形状や品質や、意匠や工芸的装飾や、……であると考えられるがもしもなし。しかし、どのように単純な形態の貨幣であつても、それが市場においてもつ意味作用とともにあることと、ゆめゆめ見損なつてはならないのである。

支払い手段としての貨幣は、支払い(payment)という執行的(performative)な行為のなかで行使される。この行為は、「ちょっとみせるだけ」とか「預か、てもらう」「手渡す」……といったたぐいの、外形的な動作に還元できる内実をもつ。すなわち、貨幣をく呈示し〈手渡す〉ことと同時に貨幣の所有主が変更されるのであり、それが問題となつてくる財の権利関係の変更と相即する事態なのである。そうであるとき、売買という行為が成立する。(支払い行為は、貨幣制度が複雑となるにしたがつて、みかけ上複雑なものとなるが、その執行的な本性において変化はない。)

支払いの際には貨幣が呈示されるが、ここで眼にうつるのは貨幣の外形(もしくは外見)である。しかし支払い行為を通じて相手の手に渡すべきは、貨幣の内実(一般的購買力として自らを現象させるもの)である。外形と内実は、特定の物存種(たとえば、金、紙幣、小切手、……)としてあるしかるに貨幣の物存性において、統一されている。だがそれゆえにこそ、支払いのような瞬間にちかひ状況のなかで、貨幣はとい自身外形によって自らを貨幣であることを、明瞭に示さなければならぬ。ここに、(もっとも単純な)貨幣(一般)について成立する、次のような意味作用が確認された:



∴ この実態は、実物としての商品、租税、より実物的な貨幣への金銭関係、なほでありうる。

9*62 貴金属(金、銀、白金、……)に対する信頼が市場における一般的購買力のそれ以上溯及できない実態であると信じられている場合、そして、貴金属ほど実物的でない諸形態が一般的購買力に転化できない(ほど信用の調達が困難な)場合、秤量貨幣がその市場の貨幣形態となるのは、当然である。秤量貨幣は、実際、さむめて多くの社

会で採られた貨幣形態であった。

秤量は、貨幣の実態とされる貴金属の存在を、都度確認する操作である。(その場合、秤りの目盛(Sa)と測定される純分(Sé)との間に、指示作用がはたらく。) この操作は、①取引の都度々々のものであること、②貨幣形態がアナログであって量化的にしろらること、によって弊害であり、実用性を減殺する。ここから、鋳貨(貨幣鋳造)の試みが生ずる。鋳貨は、鋳造の時点において純度と重量とが特定されており、したがって秤量がすでに完了した秤量貨幣である。と規定できる。(なお、補助貨幣たる硬貨のたぐいは、その通用性を、純分のうちにもつのではなく、規範にもつものであるため、鋳貨(秤量貨幣)と異なることに注意しておくべきだろう。)

10*63 鋳貨は純度と重量を特定するため、一定の成型を施される。刻印や、鋳造の型など、鋳貨をかたどる形象をば、鋳貨の名目という。名目は、しばしば重量を金属の表面に銘記するという体裁をとるが、これは鋳貨にとって本質的でない。要は、鋳貨の名目(外的形象)からその純分が知られればよいのである。この指示作用が成立するとき、秤量の手間が省かれる。

鋳貨の指示作用は、自分自身へと向かうものであるから、いかにも確実であるかに思われよう。しかし、鋳貨における形式(名目)と内容(純分)の一致は、蓋然的なものにすぎない。なぜなら、鋳貨の流動性(したがって名目の効力)は、結局のところ純分への信頼にもとがいていいるため、①鋳貨の磨耗、②鋳貨の変造、③鋳貨の改鋳(悪鋳)、④偽鋳貨、などによって容易にその一致を脅かされてしまうからである。こうして鋳貨は、不断に秤量貨幣へと変換されていく。

10*64 支払手段としての為替手形や、預り金証書のたぐいは、古くや中世の商人がしばしば用いたものである。これらは、盗難の危険を防ぐため現物であることを認め、空間的に遠隔に所在する(現物)貨幣(の支払い)を指示する文言でおきかえたものである。貸付手段としての約束手形も、時間的に遠隔に所在する貨幣に言及し、その支払いを指示する文言であるという点で、上と同様に、支払手段(すなわち貨幣)として機能できる。

これらは、一般的受領可能性をおびること、貨幣へと転化できる。これら書記貨幣が貨幣形態として特異であるのは、それが遠隔なる貨幣に言及する文言ないしテキストとして、定在する点である。貨幣(ないし現物)が遠隔なるが故に、書記貨幣はここにある。そのため、貨幣を遠隔においたままで、この文言をしるした書面をめぐって支払行為を果行することができるのである。

書記貨幣は、遠隔なる貨幣に確実に言及できるとき、信頼しうるものとなる。しかしいかなる書記貨幣も、それが確かに信頼しうるものであるとの保証を、その書面中に書きこむことができない。(少し考えてみると、その理由が判るであろう。)かくして書記貨幣は、その指示作用から自立してみずから現物貨幣(ないし信用)の地位

を獲得することかできないのである。

手形文句の自己言及性とは、文言にかかわらず「この手形は……」ないし「手形」という表示を含むことである。(手形振出し、更には商行為一般の執行的な性格については、独立の研究主題とする(価値がある。))

10*65 利殖の形態は、①貸付け $G-G'$ 、②投機 $G-W-G'$ 、③交易 $G-W-G'$ 、の3つが考えられる。(もっとも後二者は、式式からも判明するように、連続的である。)貨幣の存在と利殖の可能性の存在、したがって利殖動機の有在は同義である(市場の没入性を想起せよ)。

10*66 成算のない事業を試みようとする借り手を選別して排除できない、見境のない貸し手は、危険負担を含め、高利を課せざるをえなくなる。高利は経済活動を、なほほだ不活発にする。

18世紀初頭、絶対王制下のフランスは、このような高利と貨幣の不足のたぐいがあった。有名な John Law のシステムは、債務に苦しんだ王室とパテン師との共謀によるものであったが、貨幣が「論の構造」を築き上げることを実質的に明示した世界史上はじめの試みと言えよう(→赤羽[1978])。

10*67 当面不足する貨幣を他処からもってきて埋めあわせることはできないが、不足は解消しうるかにみえよう。しかるに、このような対処が解決でありうるのは、ある当事者にとってのみであり、この対処が自力以外の場所に新たに貨幣の不足を作りだしてしまう結果、全体として事態は以前より悪くってしまうかもしれない。

(現金の)貸付けとは、貨幣と貨幣の不在との双方向的な移転である。従ってこの操作は、貨幣の不在を抹消しうるものではない。貸付け(現金の移転)によって債権-債務関係が発生するが、これがいかに(当事者にとって)信頼すべきものであり返債が確実視されるとしても、無条件に第三者に対する支払いに充てることはできない。債権-債務関係は、多目的に相殺できるだけなのである。(手形の裏書き行為は、このような相殺、あるいは条件付きの支払い、にあたる。)

10*68 兌換紙幣の発行は、政府もしくは中央銀行による場合と、個別の券券銀行による場合と、大別して2通りある。これら銀行は、本位貨幣(たとえば、金)の準備を裏付けに、その準備をはるかに上回る額の兌換紙幣を発行した。

兌換券の発行が、単に流通手段の不足を補うという必要をこえ、専ら銀行による信用供与(無理貸付)の手段となる場合には、容易に貸付けの無理状態が生じ、不良企業が大量に輩出する。この結果は取付けと兌換停止、さらには券券銀行の倒産と兌換券の廃止と一いこととなるであろうが、これとともに、不良企業のみならず兌換券を所持するすべての経済主体が一様に打撃を被らねばならない。このように、兌

換券の発行と信用供与を結びつけるのは、ほぼはだ連続な入策である。

10*69 信用供与の手段として不完全であるという点は、不良企業を健全な企業から区別して排除、整理するメカニズムが具わっていないことである。預金通貨による信用供与であれば、個別企業の銀行取引停止=倒産の手続きを通じて、信用通貨に対する信頼をたぎため、システムを維持することができる。

10*70 支払預金は、銀行のいわゆる当座預金であり、支払いに充てるため窓口で貨幣を預けおいてあるという状態を、またにみする。(普通預金もほぼこれに準ずるが、小切手を提出して預金を支払いに充てることはできない。) これに対して、定期性の預金は、銀行に対する債権であって現金ではなく、支払い手段とはならない。それは資産の一種であって担保となることはできるが、随時に引出せるものではないのである。

11*71 実際に現金をもちこんで、それと同額の口座を開設することもできる。このような場合に、預金は^{レール}現実だとみられよう。この限りでは、当座預金は近代以前の預り金の制度と同様だとつる。しかし、この当座預金は、貸付のための擬制としても用いられるのであって、実在しない預け入れにみあった(すなわち実在する現金にはみあわない)預金の設定が銀行の手でなされる。こうして企業は支払手段である預金を、銀行はその反対給付として企業に対する債券(手形)を、入手するのだ。そして所管なことは、^{レール}現実の預金とこうした擬制としての預金が、口座勘定のなかでは互いに区別されることなく並存させられており、その結果目につかぬかたちで(私的に)貨幣が製造され供給されていることである。

11*72 小切手はみたとこ、手形と似ており、法制上は有価証券として同様の扱いをうけている。これらは額面を有し、価値をもっている。しかし、小切手を貨幣、(約束)手形を債権とみなして区別すべきであるのは、これらが「現物」と引きあてられる仕方が異なるからである。手形は、債券であるのだから、期日がくれば、相手からの取立てによって現金(たとえは預金)へと変換されることになる。手形は、その外に現物貨幣をもっており、そのため自分自身は貨幣でないから、この変換が実現しないとしても(不渡り)、これは別の形の債務へと変換されるのであって、その債務を併廃するならば市場に復帰できる余地がある。これに対して小切手は、即時に口座から引き落とされ、あるいは他の小切手と相殺されるのであって、(銀行渡りというもっとも通常のケースに明らかのように)それ以上の現物貨幣に変換されるものではない。小切手という操作を通じて、預金はある口座から他の口座へと互いに交換しあうのである。このように小切手はそれ自身が支払手段であり、その外に漸次を許さない現物性であるから、小切手が落ちなければただちに当該経済主体の支払能力はたないものと

みはされてしまう。

11*73 兌換紙幣を直輸、預金通貨を換前とみなすことができようか。なぜなら、兌換券は、たとえは金との引換之券であることにより、金のようなものであるのに対し、預金通貨は、銀行の窓口で実際の預り金証書と区別なく扱われるため、それとみまか之可能なものとなってしまうから、である。

これに対して、不換紙幣は、端的に貨幣(たとえば金)そのものとして提示されているのだから、随輸としての仕掛けをもつとみてもよいかもしい。

11*74 各種紙幣の乱発と信用の瓦解を繰り返して経験した結果、各国の通貨システムは、中央銀行を拠点とする信用調節の全般的なメカニズムをそなえるにいたった。この調節手段は、公定歩合、預金準備率の変更、窓口規制、...であるが、いずれも各銀行の信用供与を層層的にコントロールすることを且途としている。このようなコントロールが可能であるのは、預金通貨が、現物へ置換するという喩の構造をとらえているからであって、その逆ではない。

11*75 金本位制は、通貨のシステムを国家権力の意に服さない現物性の観念のもとにならざるためである。この制度は、Keynes的な需要管理と財政政策の思想に、なじまない。そのため各国は、兌換券を廃止し管理通貨(不換紙幣)制へと移行をせよ。こうして(一国内における)現金とは、不換紙幣にほかならないことになりが、このような変化は、預金通貨の資本制的な作動を妨げない。なぜなら、喩的な位階秩序は、現物のいかににかかわらず成立するからである。

11*76 完全競争市場の仮定のひとつに、マレヤビリティ(malleability)、すなわち、任意の生産財を任意に用途変更できるという条件があったが、このいささか非現実的な感じのする仮定がみしたのは、資本体が喩としての貨幣を通じて演出され、相互に結びついており、時に応じてその構成素へと解体しては再び別の資本体の運動へと組みこまれていく、という資本制に固有の運動のことであった。

11*77 形而上^{メタ}と^{メタ}いう名称は、^{メタ}身体^{メタ}の行為秩序に対して資本体が超越的層級をなす事実にもとづく。

形而上学は、身体に対してかような專制をみるう実体的な体系である。すなわち、形而上学であれば、それにとらえる身体に対して形而上作用を及ぼすのは、むしろ当然である。これに対して、資本は、それ自身ながら実体的な形而上学で包み込まれる。しかもそれは、いささかも救済のための装置ではない——ここから、20世紀をおおう深い憂鬱と無道義にのみだしてくる。

12*78 Foucaultは、主体とは所与でなく生産されるものであり、制度としてある空間を特性づける時代的な形象であることを洞察した。然らば主体とは、あるいは内面という制度とは、どのようにして開始されたのか？ Foucaultはこの鍵を、11つた人は告白という（多分に正統教会的な）パフォーマンスのなかにみとめ、さらに垂肉分離の痕跡を求めてキリスト教の性的身体の伝統のなかに漸行しながら、終身の登山迷いを経験しているかにみえる。わたしはとうとう何かとは別に、キリスト教における内面の制度の源泉を、イエスの愛の教授、なかんぐく律法に絡めた論にもなう論的な断層にみとめた（→橋爪 [1982b]）。

ところで、主体（あるいは主観）の觀念がキリスト教と密接に関連しているのだとすると、キリスト教と無縁な文明圏に属する諸社会（たとえば日本）を考察する場合に主体の概念を持ちこむことはそもそも不適當ではないか、という危惧の念も生まれてきて当然であろう。これに対するわたしの見解は、こうである——主体という、特定社会のうみだした1個の制度と、主体(性)という、あらゆる社会にみとめられる普遍的な事実とを、区別すること。たしかにあらゆる社会において、人間は主体的にふるまっているはずなのだが、各人が主体であることを自明の前提とする主体の制度を組みあけるにいたる社会は、その内ごくわががである。この区別に自覚的でないとする、主体に関する社会的な接近は、論理的な混乱に思われると思われる。

制度としての主体化の進行につれ、各人は各人の身体の主であることになる。各自身体とその挙動は、主体の自由意思に帰属するのであるから、各自身体とその挙動が、増殖する資本体の末端につまづきと整合的に排列されてゆくためには、資本体はこれら主体の自由意思の整合性を獲得することが必要にして十分なのである。主体が各自身体に対して發揮する主体性は、法的な制度化を施される。資本体は、契約を通じて、必要行為連鎖（の断片）に見合った心的自己把握を調達することができるのである。資本体は、主体の力学を通じて、集合的な身体に対する君臨の正当権を獲得する。

12*79 Weber 宗教社会等の帰結によると、現世内禁欲を帰結するのはピューリタンニズム（カルヴァニズム）なのであるが、これはその神学上の教義からするストレートな帰結反のではない。ピューリタニズムの生活倫理は、十分に資本制の主体の制度に近接しているけれども、なお利潤動機に転化するには距離があり、その正反対の契機を含み込めるのである。

ここで必要な転換は、からなずしも論理的・内在的な必然をたどる展開ではなく、偶発的ともみえる外生的な要因を織りこんでいく変質である。その11みでこの転換をば、'脱臼'と表現しておくがよからう。

こうした要因をいくつか考えてみよう。ひとつは、救霊予定説の解釈にかかわる変更である。予定説は、そのもともとの形態においては、神の予定を人間は認識できない、とするものである。《だれが選ばれた「聖徒」であるか分らない》以上、《エリ

ートだけの教会をつくることは原理的にできない》（大木 [1968:93]）。^{アスロフリアン}長毛派のよ
うな正統のカルヴァニズムは、このように考え、国教会の改革を志向した。これに對
して^{ゴクノカニシヨウ}会衆派の人々は、予定が自分らには「わかる」と考え、自分らを「見ゆる聖
徒」と規定する。彼らの教会は、かかる「福音の集まり」であり、彼らの自発性にも
とづく契約（教会契約）によって人為的に結成される。国教会の改革がすすまむし
ろ清教徒への迫害が強まるにつれ、会衆派はしだいに清教徒内部で優勢を占めるよう
になった。会衆派による予定説の改定は、国家と教会との分離をおしすすめるもの
となる。

会衆派の理想は、新大陸の植民社会などで典型的に実現される。社会と自己自身が、
信徒の集団と実体として重なるものであり、^{ゴクノカニシヨウ}いわば教会を複製した神権政体の形態を
もった。だがこの契約論的な卒業は、時間的・空間的の2方向から、変質を迫られ
る。すなわち、一方では、回心体験（すなわち聖徒としての自覚）をえられない聖徒
の子孫を、どのように選すべきであるかという問題が、もう一方では、異なる信条に
たつ会派が空間的に共存する形となる範囲での政治的統合を、どのように実現すべき
であるかという問題が、当然にも生じてしまう。後者は結局、宗教的寛容にもとづく
政治的手続きの自立、すなわち^{デモクラシー}民主制にいたる道筋を用意することになるのだが、前
者は結局、契約の書きかえ（^{ルーフレイ、コバニシ}半信契約）、さらには暗黙の再改定（^{ザンツル}見ゆる聖徒による業
の契約の確認）を通じて、資本制的な主体性へと転換するものなのである。

こうした遷移、すなわち、信仰とそれに裏付けられた諸主体の自発性から、それに
もとづく契約（敢て共同社会の空間の絶対性）へと向かうバクトルが逆転し、かえ
て共同社会の空間の絶対性から諸主体の自由意思（とそれを裏付けるはずの不可視の
各私的な価値）へと向かうバクトルにつけかわるという変化が、'脱臼'の帰結であ
る。

12*80 宗教的寛容という事態は、信仰にとどまらぬ実体的形而上学一般の括弧入れと規定
すべきものだが、これを通常の仕方では理解すれば次のようになる——ひとびとは各
自心のなかに己れの神をいだき、己れの形而上学を築きあげている。しかしこと世俗
的な活動に際しては、それらは留保され、内面におしとどめられて、外形的な行動に
うつされるのが回避される。さもなければ、この社会が神々の斗争の場、絶対に非
和解的な敵対関係となるであろうから、と。

この通念はしかし、逆にみることも可能なのだ。実体的な形而上学や哲学は、テキ
ストのかたちで現存する。それらをうみだす活動は、可視的・外形的な社会空間のな
かにはあるとは信じられないようになって、ついに各人の'内面'へと割りあてられ
てしまつたのだ、と。Wittgenstein は、歯痛のようないわゆる「個人的感覺」を例に
あげ、それらをめぐる諸個人が行為の言語ゲーム論的な状況が、歯痛なるものを各人
の内面に各私的に配当する様相を描きださんとした。宗教的寛容に後続する近代の絶
対空間は、各自の行為が排列されてある可視的な空間であって、そのなかでそれらの

行為や言表は各自の内面への漸及をさそうような仕方で行なっている。しかしその漸及は、内面にたどりつこうとするちょうどその手前の地点で途切れることになっていくのである。つまり、留保されるべきはいかなるかたちでも現前することのない内面の実体性のほうなのである。

12*81 マルクシズムが人類社会の歴史的な階級を解説する鍵としているのは、言うまでもなく、階級規定である。階級規定は、資本制社会の経済的諸関係のなかで与えられるものであり、さしあたっては経済的戦場（たとえば、所有、搾取、……）につらなるが、歴史認識のなかではこの域をこえて、古代や中世の社会関係一般の反かに延長される。古代の奴隷制、中世の農奴制は、明らかに主と僕（Herr und Knecht）の主題に向きあっているものであるが、この主題が今度は逆に、資本制のなかにもよこまれてくる。

隷属の主題は、反照的に、解放の課題をうむ。究極の解放とは、人類を階級関係一般から解きほなつたことであり、そこで救済せんとするのは「人間」の観念である。このような人間の観念はしかし、近代の絶対空間が、その空間の一律性とともた効果として産出するものにほかならない。この内環が、マルクシズムを、近代の内環のなかにとらえられたたがだが1個の実体的形而上学的位置におとしめるように、はたらいていく。

12*82 党（教条）に主導される軍の構造は、啓蒙宗教に固有のものであり、古くは十字軍を想いかぶることができる。だが各自の自覚性（主体性）にもとづいて、教会と似た組織原則によって軍を組織するという発想は、クロムウエルの鉄騎隊や新機軸軍にはじまるとみることができる。このような軍は、救済と解放のための軍であるが、20世紀後半の軍事的な分割の様相が深刻であるのは、双方がこの伝統をひいて軍事的対立と形而上学的対立とが同時に孕まれるからである。

12*83 計画化は、資源配分の効率のゆえに選ばれるのではない。教条のなかではこれは、個々の資本が一人で活動する結果全体的にひきおこされる混乱を回避するものと信じられたが、これは論証されたわけではなかった。むしろ逆に、今日では、市場の効率性が証明されなく信じられている。計画化のしこみは、これゆえ、諸々の資本の股主体化よりほかのところには、もはや求められないのである。

計画的一元化は、資本家たちの無秩序にかわって、諸々の資本体のあいだの縦列関係（分業系）に、ある意思的な関係をもちこむことである。縦列関係を具体的に特定し、どの資本体がどの資本体に対してどのように振る舞えばよいのかを、個々の資本体に指令するために、計画が、そしてどの資本体にも上位する計画主体の意思が、必要である。だがこのような指令によって、すべての資本体が秩序づけられるなら、生産活動の全体がいまや可視的な単一の資本体のもとに統合されてしまったと同じことだ

ある。（そしてこれは、後述するように、消費の領域を不可視にしようという帰結をうむ。）

12*84 Marxの預言が外れたことは、彼につきしたがおうとした人々の失望をかき、また新たな預言者の出現を待望させてもいる。彼は近代に対して、「歴史」という観念を教えたが、その内実はいまや空座となっていてしまっているから。

Marxの外れた預言のうち、窮乏化の進行や2大階級対立の激化とともに重たであったのは、プロレタリア革命が勃発するとされた地域であった。実際に示されたのは、彼の教説が受容された社会的勢力として登場できるのは資本制が日常的に苦悶する空間ではなく、かつて破壊された日々崩壊しつつある共同社会の痛苦が人々に訴求するような空間であることである。マルクシズムが後進国革命の範型をしか与えていない事実は、資本制を主体の隷属の物語であるとした解放の正当性を疑わせるに十分である。

13*85 経済の最大効率性は、（いくつかの条件はあるが）各資本体がおのみの利潤動機にしたがうところに、すなわち自由のもとに、達成されるので、計画化は（一般に）こうした効率性を外れた非効率性を実現してしまう。そして計画化は、こうした非効率性と同時に、（資本体の主体性を外的に拘束するというその定義上）不自由をも大量に生産してしまう。

13*86 党の正統性には、ひとつ、誰もしくほどの党がMarxの預言の正統な継承者であるのかをめぐり、組織論上の正統性がある。ここで考えたいのはこれと別で、資本体総体を股主体化し、非効率と不自由とどうみだすことの正当性をめぐり、教条上の正統性である。党は、議会主義をとろうと暴力主義をとろうと、資本の私有制をくつがえそうとする運動なのであるから、資本制に対してこのような正統性を弁証する必要性に迫られる。（この必要性は、社会主義体制を採用したあとにかえて、深刻な問題となると言ってもよい。）

わたしの考えでは、今日もはや、いかなるマルクシズムの党もこのような正統性を主張できるだけの根拠をもっていない。さらにいえば、革命の理念や実践を留保して、ただ階級規定だけを政策体系の前提に掲げる政治的実験の試み、すなわち社会主義にも、もはや教条上の正統性が存しないことが明らかとなってきていると思われる。社会主義は、「可能であるが賢明な選択ではない」のではなく、もう「概念上、存在できない」のである。

13*87 計画的一元化の体制は、党が一切の正統性を独占することなしには、事実上不可能である。（しばしば政治的合意の力学がはたらいているように紛飾されるが、もちろんこれは、正統性の独占を確保するための心理工作にほかならない。） こうして党と

国家と資本体を含む社会組織の全体が、教会に転化している。

13*88 マルクシズムは資本制を離脱し共産主義社会へ移行するという政治プログラムをもつ。しかし、どういった形によつて資本制を離脱できることとなるのかという、社会革命の内実や、共産主義社会の具体的な規定などといった肝心の点で、これまで明確に語られたことがいっさいもなかったのは不思議なことではないだろうか？

党が政権を手中におさめたとしても、実際にその日から経済運営を行なう食糧や生活物資を確保していく必要上、諸々の資本体の活動を調整し統合しなければならぬ。計画は、誰がどこ何をすればよいかを指定しようとするものだが、資本体の内部における各自の行為の内実（原理上）資本制下におけると異なるものではない。党の主導する経済システムは、当然その性能を資本制と比較されるようなものである。資本制空間と同位対なるといふ意味でも、資本制を離脱する種々の根拠を獲得するものでないといふ意味でも、それは資本制の亜空間なのである。

13*89 かつては教理論を唱えた P. Bell は、両体制の将来像が、相異するよりも類似するであろうと主張した。彼は、両体制の差異をみとめたうえで、それよりも技術進歩が社会に及ぼす変化の趨勢のほうが規定的であり、資本主義社会をも社会主義社会とも一様に変化させてある将来社会へと接近させていくであろう、と論ずるのである。両体制とは、言ってみれば、同じ未来へ到達するための2本のルートのような関係にある。

Bellの議論は表面的な変化を容易に外挿するもので大した価値はないが、本稿の見解と浪同さぬように、対比しておくほうがよい。私の見解では、20世紀にあらわれた共産主義を志向する試みとは、資本制に匹敵するようなもう一本の途なのでない。反宗教改革と同じような意味で、歴史に踏み迷った行きどまりの迷路が直腸のようなものである。それが急速に資本制に回帰できないのは、11つ人成立した実体的な形而上学的秩序が自律的に作動して、自らの維持をはかるゆえだ。それは、原理的に資本制を踏みこえる契機をもたないので、（純然たる）資本制との対立を生み出すのみであり、資本制の未来を考慮するものではない。

13*90 マルクシズムは厳密に言って、資本の作動を否定するのではなく、資本もしくは生産手段の私的所有制を否定するのである。

13*91 範疇論のところで言うハミは、所有論が、財の帰属を誰のものかという範疇で問題とするにすぎない、ということである。11つほう、形式的とは、行為に関して記述的であることをいう。

13*92 資本制空間が形而上学的実態を結ばない、とは、資本制が統治機構としての国家や

政治権力など形而上学的な個々の実体と無縁であるといっているのでない。後段の事実は資本制の自明の前提をなすものである。ただ資本制のもとでは、経済システムがその他の部分から分解可能となつてくるのだ（『諸君』[1981a]）。

ここで念頭においているのは、そうしたことと別であり、資本制的な市場の本質のことである。それは、計画を發振するような中心をもたない、反中心的なネットワークである。

13*93 ここで集合的意義にみたられているところの、経済活動の水準を決定する最終需要を、貨幣投票 (money voting) にたとえてみるのもよいかもしい。

13*94 マルクシズムの経済体制が解放の形而上学を体現しようとするのに対し、資本制は、救済の形而上学を集合的に表明する、と言えよう。

13*95 Edgeworth は市場の帰結を社会契約の文脈で解釈しようとし、市場均衡を各経済主体の最適化行動の総着点とみなす理解を提示した。この試行は Aumann にいたって、Walras 的な競争市場の均衡と von Neumann 的な交換ゲームのコアとが（11つかのシムフルな条件をおけばその極限において）一致するというほとんど美的な泛神を思わせる形で完成され、定式化された。落合仁司氏はこの結果を「厚生経済学の基本定理」とよんでいる。彼によれば、この結果は、「個人主義的な社会観はつねに価格メカニズムを通じて表現できる」ことを明白に論証した点で、価値ある大定理なのだ（トランプミナルにおける、落合仁司氏の口頭報告による）。

13*96 Edgeworth-Koopmans-Aumann 流の議論はその前提に、各自の効用もしくは選好の体系を有する諸個人をおいている。そして、議論のなかでは少くとも、それら効用や選好体系の存在を疑わない。

こうした議論の前提自体を、反省的に考察する必要がある。それはむしろ、単純な個人主義への反撥から、全体的な効用や選好体系にそれにかわる実体性を与えようとする、Bergson 流の試みとも異なる。

Foucault - 内田隆三タイプの議論は、主体（の^{ポリティック}実体性）が、社会空間におけるその制度的な近隣から代補されるというロジックを示した。これら主体とは、いわば、解消される特異点なのである。

落合 [1982a] [1982b] の議論についても、このような角度から再解釈を加えることができよう。彼の議論は、市場メカニズムに代表されるような個人主義的な理論はかならずその背後に何らかの制度的な前提をかくしている、と指摘する。市場均衡や価格体系のように諸個人の自発的行動から導出される全体的な事象を、交換（＝双方有利化行動）の集積的な帰結として仮設演繹的に再構成するのが、個人主義的な社会観にもとづく社会理論であるにちがいないのだが、その理論的な執行の成功は、之

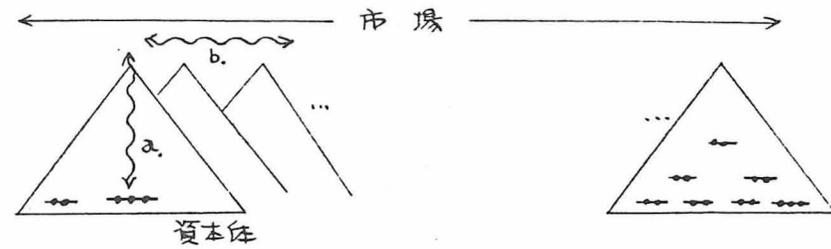
の枠組みのなかでア・アリオリに保証されていない。その保証は、交換の反対物であるところの紛争 (= オオカリに・他オオカリに行為) があらかじめことごとく事前の解決を与えられた場合に、ようやくえられるのである。 (たとえば Edgeworth の議論でいうなら、初期手持ち量の割合で、あるいは市民社会論の枠組みで言えば近代的な所有権の設定が、このような前提に相当する。) といゆえ、彼の解決によれば、個体主義的な社会理論の試行というものは、それ単独で可能であるわけでも完結できるわけでもない。たしかに逆動的ではあるが、諸個体の功利主義的な行動の集積として社会を説明する枠組みの説明力は、その反対物である (かにしばしば信じられる) 制度論によつて、あるいはより直截に言えば規範論によつて、維持されるのである。彼自身はここに、Durkheim - Saussure - Lévi-Strauss 的な学統の積極的意義をみとめ、社会科学の各部門における『構造的な方法』の展開をめざしているといわれるが、われわれには議論の全体を逆方向からたどつてみるのも興味ぶかい——諸個人に効用を仮設する議論の効力、規範論を暗黙の前提とすることではじめ発現されるようであるのだとすると、この社会理論内部での論理構成の機序は、社会空間内部で生ずる諸事態の機序と照応するようなものではないだろうか? すなわち、諸個人の、効用にもとづく主体的な自発的活動というものを分留してくるのは、空間の全域に行きわたつた (ある) 規範あるいは社会制度の作用なのであり、このような制度こそが、各経済主体に各私的に内属する価値体系を配当する当のものではないだろうか? 規範が紛争を処理してのち交換が開始されるとする、『落合構造学説』は、各私的な価値実体を規範が『生産』するロジックを明らかにするものとも考えられよう。

13*97 労働力の売買を實現する賃労働契約の内幕は、このように解消される。このようにまったく無定形な行為は、厳格な律法に規定される行為の対極に、救済と恩寵の圏外にあるとも表象されよう。

14*98 十分に大規模な資本体であるなら、その作動の全貌は労働者各自の視野をはるかにほみだしていきかねない。しかし利潤動機という主体性にもとづいて資本体を作動するものであるとするなら、労働者各自は、その想像力にもとづいて、あるいは資本体のうみだす神話作用 (たとえば、経営の哲学) にもとづいて、彼の労働行為が埋めこまれる全体的な文脈の欠落を、さうにか埋めあわせることもできよう。この手順は毎するに、彼の行為連鎖 (の断片) を、資本体が發揮するとこまる集合的な主体性に結びつけることで果たされる。

しかし問題にしたいの、ここではない。このような主体性の接木 (もしくは拡大投影) によつては、賃労働を構成する行為連鎖 (の断片) に対する積極的な意味規定が完了しない、といふことにむしろ注目したいのである。

行為の統合関係は、資本体として實現されている機軸系をなりたせる技術論的な必然の範囲内では、たしかに資本体の發揮する主体性を賃労働の文脈に追加すること

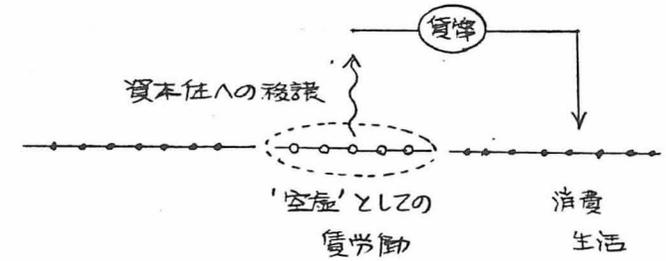


a: 主体性の接木 (もしくは拡大投影)
b: 資本体相互の連接
c: 行為連鎖 (の断片)

で、資本体内部で解凍できよう (上図, a)。しかし行為の連合構造は、資本体の相互的な連接のなかに仮託されているのであり、個々の資本体の發揮する主体性を、相殺し、恣意的なものとして無化する方向にはたらく。これは、さきの拡張の方向と、噛みあわない、それと直交する方向をむいている (上図, b)。市場は、このように、賃労働の意味づけを偶然的かつ不透明なものとするのであって、a → b の意味づけの延長可能性は、市場に与えられる集合的承認、すなわち消費の哲学のなかで、蓋然的に回収されるほかはない。

14*99 賃労働は、一定の限度内において特定他者の指示に服するという、臣従や奉仕とは、また異なるものである。それは、それ以外の部分の行為連鎖をなりたせる行為秩序の側から延長のしようもなし断絶に、両端を挟まれている。あるいはみでいえば、病理的な被作態体験に近いところまである、といえよう。

行為連鎖に穿たれたこのような空虚は、資本体がそれに対して課す行為形態を通じて了解されるというよりも、行為の發揮にもとづいて対面によつて了解される。この対面 (賃儲) によつて、彼の賃労働のみが、その消費生活において事後的に (再) 発見されていくのである。 (行為論としてみるなら、賃労働は、自分自身とのあいだのメフィスト的な契約である。)



14*100 実証主義の体感をとる理論経済学においては、各自の効用ないし選好体系が実体的な前提であり、その必要のために彼の所有する資源——労働力——を処分して、市場から各種の入替な財を購入する、という構図が描かれる。

同じ事態を行為分析の視角からとらえなおしておくことが、後の議論のために重要である。行為連鎖のうち、賃労働として資本体へ移譲されなかった部分は、いわゆる資本体の域外にとどまり、消費生活を構成する。消費生活に想定される価値的なものの実質とは、生活様式、すなわち、彼（賃労働者）の自由になしうる行為と事物とのある適格な（美的な）排列にほかならぬ。その実態は、行為をそれとして成立たせる形式性である。（消費）生活が意味的でありまた価値的であるとすれば、それは、彼の行為が独自の統合構造をもって完結する場合であろう。このような実態性は、もっとも通常には、共同社会の文化的な基盤によって与えられる。

14*101 生産/消費という対比は、経済分析でもっとも基本的な対峙区画であろう。この区画は、まず消費をもっとも基底的な概念として樹て、ついで、資源（＝自然的な物在一般）を消費に適合するように変形するプロセスとして、生産を概念的に定立する。

このような対比に種々な言いわけは多いが、われわれが注目したいのは、資本制下においてはこの生産/消費の対比が、各自の行為連鎖の内部における賃労働と残余部分との対立として、現象しはじめることである。もともと人間の行為連鎖のなかには、このような顕著な範疇的対立といたものはなく、ひとつづきの秩序に浸っていた。行為はそれ自身、生産であるか消費であるか現定すべきものでなく、端的にいつて表現であったのである。こうした行為＝労働＝表現の「三位一体」を裁断する画期は、ひとつには、分業系が市場を遍する交際という形態化を見出したとき、いまひとつには、資本制的賃労働が成立したとき、だったのである。

生産/消費の対比は、それゆえなにか実体的なものの対比であると考えられるべきでなく、行為連鎖の集合的・編成的形態に付随する分割にちとぐくと解すべきものだ。

14*102 諸個人の消費が、経済活動の全体、なかんづく資本体の一連の挙動に対する集合的な義認 (justification) を与えるものであるかどうかは、消費の実態である生活様式が、資本体の自己増殖的運動から独立の事象であるか否かにかかっている。註14*101での述べたように、通常の理論経済学はアリアリに実定的な効用の存在を仮定するから、消費を通じてこのような集合的な義認手続きが果たされていることは、ほとんど自動的に自明であるとされる。しかし行為分析は、別な結論をひきだす。

たしかに消費生活において、各人の行為連鎖は特定の資本体へ下属するものではなく、そのいみで資本体の域外にある。しかしこれだけでは、そうした行為が資本体の運動から独立であることの、十分な証明とはならない。資本制のごく初期においては、各人の生活様式は、なほ伝統的な共同社会の習俗に色濃くまといわれていた。工業製品は、生活様式を構成する個々の事物に、個別におきかかっていったにすぎない。やがて事態はすすみ、生活様式は、かつてなかった行為と事物の排列にもとづく消費形態をさがみはじめた。それでもこれがかつての伝統的な生活様式からの比較の連鎖の上であり、「便利さ」の累進としてとらえられるあいだは、また資本制に対する価

値の独自審級としての仕格をうしなわなければならぬであろう。だがついに、「便利さ」の累進をうまわる消費生活の異様な形態変貌が生い始めるとき、資本制はかつて経済理論が描きだしたような古典的な構成を脱出しかけていると考えられる。消費は、資本体総体の〈外〉ではなくなった。

このような変化がなぜ生じてくるかを考えよう。効用実体的に発想すれば、それは、資本制の生産メカニズムが、次第に効用の小さな財貨、奢侈品、不用不急の物品を生産しなければならなくなったから、と考えられよう。しかしそれは、どうも真相と違っている。この消費の変貌のなかでは、実用的なもの/非実用的なもの、の対比それ自体が溶解し、おそろしくいみを喪なっていったのだ。重要なことは、「賃労働者＝消費者が、もはや彼の消費生活のなかで、彼独自の行為と事物の統合の形式を保ちえなくなったことである。彼が展開すべき行為連鎖の形態は、製品とともに資本体のなかで設計され、彼を制約すべく送りとどけられる。製品のひとつひとつは、権力的な作用素としてはたらきはじめた。

消費生活のこうした変貌に対して、そのうち「より実用的な部分」「機能的な部分」「より人間的な部分」を固くこむことで、何らかの対抗を果てようとする企図は、そもそも実用的なものの線引きが不可能であるという点からして、実行不能であるし、戦略的に無益でもある。こうした変貌をとおして別のものへと変化しつつある資本制を、記号論的に、すなわち行為分析・形式分析を駆使して、解明する作業のほうが生法である。

14*103 私の理解によると、Baudrillardの消費社会論のねらいは、効用という実定的な概念にもとづく近代経済理論の究証性を、解院することにある。しかしながら、効用概念を100%私拭するという目標は、彼のやり方では果たすことができないと思われる。

14*104 行為を述定することは一般に、想像以上に困難なことではある。だがここで「言葉の術なき」とのべるいみは、たんにそれにとどまらない。

賃労働における行為の形態化と排列・編成は、資本体の課する要請による、このべた。このため、この行為に言及し、またそれを言及しようとするとき、期せずして資本体の義する言説（服務規律のたぐい）に吸いこまれてしまうことになる。

14*105 消費の過剰は、計画化のまぶさからくるのではなく、計画化そのものから帰結する。経済の計画的一元化は、諸々の資本性を単一の資本体へ統合する結果をまねいたが、このことはとりもたえず、資本体の作動と対等しうべき消費の独自性を、ほとんど抹消してしまうからである。

14*106 資本体は、内へ向かつては、賃労働に沈黙を強いることをのべた。外へ向かつては

れは、広告の言説をふりまく。広告の遊戯は、もちろんのこと、消費生活の変貌と利用の解体の重要な兆候である。

広告の特質は、(i)無償で、(ii)遊戯的な言説であり、(iii)製品に付着し、製品とともに消費され新陳代謝してゆき、(iv)資本体の競争のなごまで競争的であり、したがって総体として宇宙論的な渦巻を造出する、という点にもとめられよう。それは意味ありげでありながら、意味の解脫を志向しており——宇宙論的なものだから当然である——各私的な価値の実現の過程を資本体の増殖傾向と不可分に連続させようとはかる。資本体の総体が繰り出すこの広告という言説は、この宇宙論的な渦巻の発揮する神話作用を通じて、資本制における形而上学的実体の不在を充填し、賃労働と消費生活の区別を抹消するようにはたらきながら、資本制の〈外〉をついに不可視のものとするのである。

144107 資本制への追慕をはかるこの試みは、資本制に対する批判的な接近であるとはかたがたしむる考えられていない。むしろそれは、因果論的な接近である。資本制の完成と瓦解の瞬間と重なるとすればそのためである。11つその展開についてこの続稿を明すべし。

(本文 30 枚; 註・文献 130 枚)

文献

- 赤羽 裕 1978 『アンシャン・レジーム論序説 ～18世紀フランスの経済と社会～』、みすず書房。
- 秋元 波風男 1935 『失行症』、金屋商店。→1976 東京大学出版会。
- Barthes, Roland 1964 'Éléments de sémiologie', *Communications* -4: 91-135. = 1971 沢村昂一訳, 『記号学の原理』, ロラン・バルト 『愛蔵のエクリチュール』: 85-206. みすず書房。
- 橋爪 大三郎 1975 『家族・親族・社会システム ——人類学的交換理論の論理とその拡張——』, 『家族研究年報』1: 12-24。
- 1977 『加工品の眩暈』, (未発表)。
- 1978 『経済の人間化』, (未発表)。
- 1979 『喻としての貨幣(物)』, 『ソシオロギス』3: 116-121。
- 1979/1980 『〈言語〉派行為論の基本構図(1)～(3)』, 『止揚』30: 20-29; 32: 21-32; 33: 30-41。
- 1981a 『法の記号論』, 『記号学研究』1: 95-106。
- 1981b 『青春のどろろろ』, 『女性の社会問題研究報告』4: 24-53。
- 1981c 『太平洋の交換経済』, (未発表)。

- 1982a 『戦後日本の正統論』, (未発表)。
- 1982b 『性愛論』, (未発表)。
- 1982c 『記号論入門』, (未発表)。
- 井山 圭三郎 1981 『ソシユールの思想』, 岩波書店。
- Morishima, Michio 1973 *Marx's Economics: A Dual Theory of Value and Growth*, Cambridge University Press. = 1974 高須賀義博訳 『マルクスの経済学——価値と成長の二重の理論——』, 東洋経済新報社。
- 落合 仁司 1982a 『構造経済学——序説』, 『ソシオロギス』6: 30-37。
- 1982b 『法経済学序説』, 『季刊現代経済』51: 119-127。
- 大橋 博司 1960 『生活・失行・失認』, 医学書院。
- 大木 英夫 1969 『ピューリタン——近代化の精神構造——』, 中央公論社。
- 巨 田 明彦 1979 『行為の記号論』, 『ソシオロギス』3: 122-133。

CN 135
¥ 125-

HASHIZUME, Daisaburo
1982-12-17